

国際子ども図書館 の 窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第 1 号
2001.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏



《国際子ども図書館開館》

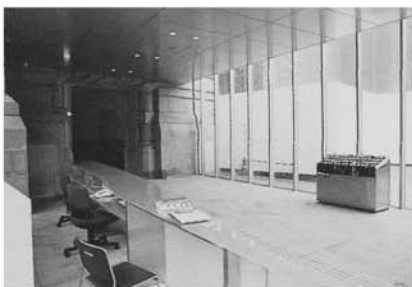


平成12年5月5日（こどもの日）、東京上野に
「国際子ども図書館」が開館しました。



〈開館記念式典〉

カフェテリア



1階 エントランス

2階 資料室



3階 ミュージアム

4階 子どもの部屋



<館内各階の様子>

<目次>

口絵 国際子ども図書館開館

国際子ども図書館について =戸張正雄 ・ 2

『国際子ども図書館の窓』発刊にあたって =亀田邦子 ・ 3

<国際子ども図書館開館記念特集>

—開館記念式典より—

皇后陛下のお言葉 ・ 4

祝辞 =バーバラ・シャリオット ・ 8

国際子ども図書館が誕生するまで =和中幹雄 ・ 12

「子どもと本と読書」

—国際子ども図書館開館記念国際シンポジウム— (抄録) ・ 15

I B B Yコロンビア大会参加記 =亀田邦子 ・ 45

活動報告 ・ 48

世界の児童書—コレクション紹介— ・ 55

数字で見る！国際子ども図書館 ・ 56

これから… ・ 60

利用案内 ・ 61



国際子ども図書館について

昨年の5月5日に、皇后陛下のご臨席の下、衆参両院議長はじめ多数のご来賓のご列席をいただき、たくさんの人々とともに、盛大に「国際子ども図書館」の開館式を挙行できましたことは、この上ない幸せなことでありました。あれから早くも9ヶ月が経過いたしました。すでに約8万人の方々にご利用いただいております。開館に至りますまで、国立の児童書専門の図書館がほしいという社会の強いご要望を背景に、国会議員をはじめ児童書の専門家などたくさんの方々のお力添えを得て計画を進めてまいりました。そして、多くの皆様には、いろいろなご期待をもって開館を楽しみにしていただいていたのであろうと思います。さて、ご来館いただいたご感想はいかがでしたでしょうか。

来年春には、改修工事が終わり全面開館いたします。「子ども室」も広くなり、本も、いまの10倍くらい並べられます。ここでゆっくり勉強や読書をする事ができるでしょう。また、子どもたちの「おはなし室」もできます。時代の要請に応じ、電子出版物というものを閲覧するコーナーも作る予定です。大人のための「資料室」も広くなり、特別に研究する方のための席も用意いたします。そのほか、多目的ホールやミュージアムのためのスペースも十分取れることになっています。何より書庫ができますので、20万冊近い蔵書を提供することができるようになります。

いつも2階の「資料室」では大人の方が読書をしておられますし、3階のミュージアムではたくさんの方が熱心に展示をご覧になっておられます。そして4階の「子どもの部屋」ではお母さんと一緒に小さいお子さんが楽しそうに絵本を見ている様子を見かけます。幼い瞳には物語の世界に遊ぶやわらかい心が宿っているようです。

国立国会図書館のこれまでの経験は、「資料室」に関しては十分生かすことができますが、「子ども」に関する部分は新しく勉強しなければならない分野です。いまの時期、ここに重点を置きすぎるくらいで結果的にバランスがとれていると思っています。開館以来、経験者の知恵に学びながら懸命に努力しており、過去6回の展示も手作りです仕上げました。これからも、いい仕事をしてけると信じています。

やがて全面開館ともなれば、規模も大きくなりますし、新しいこと、とりわけ国際的な問題にも取り組まなければなりません。いまから準備をはじめても早すぎることはないでしょう。建物は立派な歴史的建造物です。中に子どもの感性に配慮した細やかな心遣いをちりばめ、子どもの本の中心として、大人にも子どもたちにも、いつでも心に描いてもらえる明るくそして存在感のある図書館になってほしいと念願しています。ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2001年2月

国立国会図書館長 戸張正雄





『国際子ども図書館の窓』 発刊にあたって

子どもの本と読書に関心をもつ多くの人々の夢を載せて、昨年5月、国際子ども図書館が部分開館し、以来、多くの来館者をお迎えしてきました。

国際子ども図書館は、子どもの本の専門図書館としては初めての国の機関として設立されました。質、量ともに世界有数の規模を目指し、国際的な連携と利用を目標とする、

子どもの本のナショナル・センターとして、この図書館に課せられた役割と責任の重さを感じる時、身の引きしめる思いがいたします、とともに、皆様の期待に添えるような図書館にしていきたいと、職員一同、日々研鑽を重ねております。

皆様と国際子ども図書館をつなぐものとして、この度、『国際子ども図書館の窓』を刊行する運びとなりました。この図書館の活動を皆様にお伝えして、ご理解を深めていただくとともに、子どもの本や読書について皆様とともに考えていく一助にしたいとの願いがこめられております。『窓』は、国際子ども図書館の中を見通すためのものであると同時に、外界から新鮮な風や光を取り入れるためのものでもありたいと考えております。当面は、年1回の刊行とし、当館の活動報告等を主といたしますが、いずれは、子どもの本や読書に関する情報や議論の行き交う場所としたいとも思います。

第1号の本誌には、国際子ども図書館開館記念特集といたしまして、開館に至る経緯を始め、開館記念式典での皇后陛下のお言葉と海外からの御来賓代表であるミュンヘンの国際児童図書館長シャリオット博士の祝辞も掲載いたしました。お二人の示唆に富むスピーチは、今後、私ども国際子ども図書館の職員が活動をしていく上で、また、広く、子どもの本と読書に関する活動に関わる人々にも励みとなるものと思います。本号の中心は、開館を記念して開催した国際シンポジウムの抄録です。海外と日本の斯界を代表する方々によるシンポジウムの内容は、今を生きる私たち大人が、21世紀の子どものため、何をすべきかについて考えるきっかけを与えてくれましょう。

来年、2002年には、国際子ども図書館の建物の改修工事も完了し、いよいよ全面開館を迎えることとなります。図書館は、資料、システム、サービスのいずれにおいても、長い時間をかけて成熟していくものです。全面開館後もこの図書館を、そこに働く職員と利用される皆様とが一緒になって、真の子どもの本の拠点となるように育てていかなければなりません。そのために、この『国際子ども図書館の窓』が、ささやかながらも一役かってくれるものと期待しております。

2001年2月

国際子ども図書館長 亀田邦子



<国際子ども図書館開館記念特集>

—開館記念式典より—



皇后陛下のお言葉

国際子ども図書館が、その第一期の工事を終了し、こどもの日の今日、開館されることとなりました。子どもの本や読書にかかわる中で、いつか日本にも国立の子ども図書館ができればと、永年にわたり願ってこられた大勢の方々、そしてその声に耳を傾け、その実現のために協力された方々の御努力によるものと、心よりお祝いを申し上げます。また、この式典には、ドイツ、フランス、インド、大韓民国、タイ、米国からも、この分野に豊かな経験を持たれる方々が出席してくださいました。御参加は、これから国際図書館として育っていくこの館の成長を見守る私どもにとり、大層心強く、皆様の友情に対し厚くお礼を申し上げます。

この度開かれる図書館は、今から94年前創建された日本最初の国立図書館の建物を改修して造られました。歴史的建造物の指定を受けた建物であり、その大方の意匠や構造の保存、土台の耐震工事など、設計者を始めとし、工事に当たった方々にはどんなにか御苦勞の多いお仕事であったことと思われます。しかし、今世紀の初頭に明治の人々が気概を込めて造った建物が、その内外装共に最大限に保存されつつ改修されたことは意義深いことでした。この歴史的な建物の中で、これから子どもたちは日本や世界の沢山の書物に触れていくことでしょう。同時にこの館は、子どもの本を書いたり、研究したりする人々、また、日本の各地の図書館で働く人々にも便宜を供し、その仕事を支援するという、もう一つの大きな役割も担っ



ています。直接子どもに奉仕するとともに、「子どもに奉仕する人々に奉仕する」という、この図書館に課せられた二重の役割を、社会が深く認識し、支持していくことが、これからの館の発展の上で非常に大切なことになっていくのではないかと考えております。

現在日本には約2,600の公立図書館があり、その多くが児童室を備えています。まだ、十分とは申せぬまでも、ここに至るまでの先人の御苦勞がしのばれます。自らの体験から、本と子どものつながりに深い意味を感じとられた方々が、多くの困難の中にも夢を捨てず、子どもの図書館の今日をもたらしてくださいました。

日本には、戦後、主に女性によって始められ、昭和45年以降野火のように全国に広がった、我が国独特の子ども文庫の活動があります。文庫は、個人が所蔵する本と住まいの一部を、近隣の子どもたちに開放する形で始められた小規模の児童図書館で、現在その数は公立図書館の倍近くにも及び、「BUNKO」という日本語のまま、世界からも注目を受けるところとなっています。

公立、私立、学校、文庫と、図書館の形はそれぞれに違っても、そこにはきっと一人一人、子どもたちと本とのよい巡り合いを願う図書館員が働いておられるでしょう。日本の各地で子どもと深くかかわり、子どもへのよりよい奉仕の道を模索している人々の気持ちをしっかりと汲み上げつつ、国際子ども図書館が、これらの組織と常により連携を保ち、共に学びつつ支援を続けてくださることを期待しております。

大きな責任を担って開館時の仕事に当たる方々が、皆体を大切にされ、元気に任務を果たされますように。また、この機会に、日本の各地の図書館や文庫で、地道に活動を続けておられる大勢の方々の健康をお祈りいたします。皆様方のお仕事も、これからもたくさんの子どもたちに、本を通して楽しみと喜びを与え、子どもの中に自ら考え、健やかに生きぬく力を育てていくことを願い、お祝いの言葉といたします。

(英訳)

Address delivered by H.M. Empress Michiko
at the inaugural ceremony of the International Library of
Children's Literature
May 5, 2000

On completion of the first stage of renovation work, the INTERNATIONAL LIBRARY of CHILDREN'S LITERATURE is being inaugurated today, Children's Day in Japan. To the many people involved with children's books and reading, who for long years have been hoping for the establishment of a national children's library, and also to those people who lent an ear to their voice and made every effort to cooperate in realizing this worthy project, I offer my heartfelt congratulations. Also many persons with ample experience in the field have come from abroad to attend this ceremony, from Germany, France, India, the Republic of Korea, Thailand, and the United States. Their presence here is very heartening indeed for those of us who will be watching over the future growth and development of this establishment as an International Children's Library, and I would like to express my warmest gratitude to them for their friendship.

The Library inaugurated today is housed in the building which was once Japan's first National Library. It was built ninety-four years ago and has been designated a Historical Edifice. In order to preserve the main features of the original structure and workmanship and render the foundations earthquake-proof, one can imagine what difficult and challenging work the renovation planners and the people involved in carrying it out were faced with. Raised at the beginning of the twentieth century and imbued with the resolute spirit of the people of the Meiji era, the renovation of this building which was carried out while preserving the original design of the interior and exterior to the fullest extent possible, was in itself a thing of deep significance. From now on, within the walls of this historic building children will be able to have access to a great many books, not only Japanese but also foreign publications. At the same time, this building offers facilities for persons engaged in writing children's books or researching juvenile literature, and for the personnel of libraries in every region of Japan, providing moral and other support for their work, thereby carrying out yet another important role. As well as directly serving children, what is called "Serving Those Who Serve Children", gives to this library a double role which should be appreciated and strongly supported

by society, and I think this appreciation and support will be of very great importance in the future development of this library.

In Japan at the present time, there are about two thousand six hundred public libraries, most of which provide children's room. While we cannot say that it is enough, this point was reached thanks to the hard work of our predecessors toiling unseen, and my thoughts go out to them in deep gratitude. Such people, sensing a profound meaning in the links between children and books, even when beset by difficulties never gave up their dream and were instrumental in bringing about what the Japanese children's library is today.

In post-war Japan, started mainly on the initiative of women, we have children's *bunko*, activities unique to Japan. *Bunko* began with individuals throwing open to neighborhood children a part of their dwellings with their private holdings of books, a small scale form of juvenile library. The number of such *bunko* is now nearly double that of public libraries, and the Japanese term *bunko* itself has come to the point of attracting world attention.

Libraries of various categories such as public, private, school or *bunko*, may differ as to form, but surely the librarians who work in them are at one in wishing for each and every child a beneficial encounter with books. Drawing steadily upon the ideas and good-will of persons working in the libraries all over Japan who are deeply concerned with children and seeking the best way to serve children, it is my hope that this International Library of Children's Literature will always maintain a good collaborative association with those persons, learning together with them and continuing to support them.

I hope that all those who must shoulder heavy responsibilities at the time of inaugurating this new library, will take good care of themselves and carry out their duties in the best of spirits. Also, I would like on this occasion to express my best wishes for the good health of the many people continuing to work quietly in the background all over Japan in libraries or *bunko*. May your valuable work continue to give pleasure and joy to many children through the medium of books, and help them, thinking for themselves, to get from their reading strength to foster in them sound and healthy spirits to face courageously their future lives.

＜祝 辞＞（日本語訳）

ミュンヘン国際児童図書館長 バーバラ・シャリオット



はじめに、はるかドイツのミュンヘン国際児童図書館から皆様にお喜びのご挨拶を申し上げます。私たちは、本日東京に「国際子ども図書館」が開館することを皆様と共に喜んでおり、またこの開館記念行事に列席できることを私はとても誇らしく、かつ光栄に存じます。私たちは、何年もの間、— 姉の目で見ると — この図書館の開館準備を大きな関心と共感をもって見守り、また時にはいくらかのアドバイスも差し上げてまいりました。この国際子ども図書館の計画を精力的に推進された方々に感謝すると共にその成功をお祝い申し上げます。皆様方のご尽力の賜物として、この開館の日を大いに楽しませますように。

今日という日は、まるでおとぎ話の中のように、夢が現実となる、そういう日です。そこには、児童文学、青少年文学が若者たちに平和、自由、平等、寛容、兄弟愛、あるいは文化間の相互理解について語る時に持つ精神的な力という夢があります。また、現実の場所への夢があります。それは、一国の文学の — そしてそれ以上に、文化の — 重要な要素である児童・青少年の本のためにつくられた、よく目に見える形の舞台装置、すなわち世界の児童・青少年文学のための図書館のことです。さらに、子どもや青少年のための本を書き、挿絵を描き、翻訳し、出版する者たちの文化間交流という夢があります。彼らは皆、インスピレーションと意欲の源泉として、そして若い読者への彼らの責任を思い起こさせるものとして、貴図書館とその国際的な蔵書を必要としています。

50年前に世界で最初の国際児童図書館が設立されたとき、創立者イエラ・レップマンを導いたのはまさにこれらの夢と「子どもたちの世界は一つ」というイメージでした。「子どもの本は他の何にもまして人間愛という共通基盤をもっている」という確信に立ち、イエラ・レップマンは第二次世界大戦終戦直後のドイツを精神的に支援しようと児童・青少年文学の国際展示会を企画しました。多くの人々が家族や住む家を失い、ただ生存のために最低限必要なものを確保するためにもがき疲れ果てていたにもかかわらず、展示会には大勢の人が訪れました。彼らは、ヒトラーのドイツの外側では、子どもや若者たちに、平和と自由の中での新しい生き方への希望を与えてくれるような本が出版されていることを知ったのです。

この展示会の直後、1949年9月のミュンヘン国際児童図書館の開館にあたり、子どものための小説『エーミールと少年探偵団』（1929年。日本での出版は1950年）によってここ日本でも有名なドイツの作家エーリヒ・ケストナーは、彼の「世界の子どもたちみんなへの手紙」の中で、次の言葉を記しています。

「絵本はどこに送られようと、誰もが理解できるでしょう。絵本ではないものは、



あなたたちのうちの誰かだけが読むことができるでしょう。そして結局、あなたたちのうち誰も理解できない本がかなりあることでしょう。たとえば、あなたたちの中で日本語の読める人はいますか？ いないでしょう。でも、日本の子どもの本は、あなたたちも私たちおとなもみんなを楽しませ、教えてくれるでしょう。」続けて彼は、日本の本はどうやって読むのか、それがヨーロッパの子どもたちには全く珍しい読み方だということに言及しています。

そしてエーリヒ・ケストナーは正しかったのです。国際児童図書館の創立から50年後の今日においても、世界中から集められた50万冊からなる私たちのきわめて多様な蔵書は、子どもとおとなを引き付けてやまず、外国とその文化の大使としての役割を果たしています。多くの訪問者が世界のはるか遠くの地から来た本や異なる時代の本をはじめ手に取ることができるこの図書館においても、事情はきっと同じであろうと思います。何とすばらしいことでしょうか。

児童・青少年文学—とくに創作文学と絵—は、とりわけ世界的電子ネットワークの時代にあって意義深いものであり続けると、私たちは強く確信しています。ほかのどんなメディアとも違って、児童・青少年文学は若い読者たちの心を掻き立て、彼らが内面に持つ思いや夢を励まし、世界の断片を、一まるで凸レンズの中に見るように一視界に浮き立たせ、それゆえ、彼らの個人的成長に寄与します。若い人たちの人格的発達を促進することは、この画一的で均質な大衆文化の時代にあって私たちの最も重要な目的の一つです。

ここ東京の「国際子ども図書館」は、私たちにとっては、援軍でありまた刺激剤でもあります。私たちは皆様と協力し合うこと、デジタル・ネットワークの助けで今や可能となった緊密な専門家同士の交流に携わることを心から待ち望んでいます。私たちは、児童書専門家のユニークな世界的な連合体である国際児童図書評議会（IBBY）をはじめとする他の子どもの本に関する組織と共同して、世界のどの国も、若い人たちのための支援と育成のプログラムの中に永続的で確かな場所を文学に与えるであろうという希望をもって、児童・青少年文学のために共に活動していきたいと思います。

注) 式典でのシャリオット館長の祝辞は、時間の都合で本来用意された祝辞を若干省略して短くしていただいたものです。ここには本来の省略していない全文を掲載いたしました。

Words of Greeting (原文)

Dr. Barbara Scharioth

(Director, Internationale Jugendbibliothek)

First of all I bring you all the best wishes from the International Youth Library Munich in far away Germany. We share in your happiness that the “International Library of Children’s Literature” can be opened here in Tokyo today and I am very proud and honored to be present at this event. For years we have been following—as with the eyes of an older sister—the preparations for this library with great interest and sympathy and even been able to offer some advice now and then. Let me express thanks to everyone who has been actively promoting this international children’s library and congratulate you all on its success. May you enjoy this opening day as a sign of recognition and appreciation of your efforts!

This is one of those days—almost like in a fairy tale—when dreams become reality. There is the dream of the moral power of children’s and youth literature as it tells young people about peace, freedom, equality, tolerance and brotherly love, about intercultural understanding. There is the dream of a real place, a highly visible setting for children’s and young adult books as an essential part of the literature—and even more, of the culture—of a country: a library for international children’s and youth literature.

And there is the dream of an intercultural exchange between those who write, illustrate, translate and publish books for children and youth. All of them need this library with its international collection as a source of inspiration and motivation, and as a reminder of their responsibilities toward young readers.

Fifty years ago, as the world’s first international youth library was founded, it was these very dreams and the image of “one children’s world” that guided Jella Lepman. Acting on her conviction that “children’s books, more than any others, have a common ground of humanity”, Jella Lepman organized an international children’s and youth book exhibition as one form of moral support for Germany immediately after the end of the Second World War. Although many people had lost their families or the roof over their heads and were worn down by the struggle to secure simply the basic essentials of life, they came in great numbers to the exhibition. They realized that outside of Hitler’s Germany there were books being published for children and young people that would give them hope for a new way of life in peace and freedom.

At the opening of Munich's International Youth Library in September 1949—which followed directly from this exhibition—the German author Erich Kästner, who is also famous here in Japan for his children's novel "Emil and the detectives" (1929 ; Japanese 1950)—wrote the following words in his "Letter to all the children of this world" :

"Picture books will be understandable to all of you, no matter where they are sent. Other children's books will only be able to be read by some of you. And, finally, there will be quite a few books that cannot be understood by any of you. Who among you can read, for example, Japanese? But a Japanese children's book will entertain and instruct all of you and us, the grown-ups, as well." Then he continued on to describe how Japanese books are read in a manner quite unfamiliar to European children.

And Erich Kästner was right. Even today, fifty years after the founding of the International Youth Library, our highly diverse collection of half a million books from all around the world continues to attract children and adults, acting as an ambassador of foreign countries and cultures. Surely it will be the same in this library, where many visitors will for the first time be able to hold in their hands a book from a distant corner of the world or another era in history. How amazing!

We are thoroughly convinced that children's and youth literature—especially fictional stories and pictures—will remain meaningful especially in the age of world-wide electronic networking. Unlike any other medium, children's and youth literature stimulates the minds of young readers, encourages their inner thoughts and also their dreams, and holds pieces of the world up to view—as if in a burning glass-, thus making a contribution to their individual growth. Promoting the personal development of young people is one of the most important goals we have in this age of unifying, homogenizing mass culture.

The "International Library of Children's Literature" here in Tokyo is for us reinforcement and impetus at once. We are very much looking forward to working closely together and to participating in the intensive professional exchanges that are now possible with the help of digital networking. Together with other children's book organizations—including, first and foremost, the International Board on Books for Young People (IBBY), the unique world-wide association of children's books specialists—we will work together on behalf of children's and youth literature in the hope that every country in the world will grant literature a permanent and secure place in their programs of support and development for young people.

～国際子ども図書館が誕生するまで～

国際子ども図書館の設立計画が具体化してから昨年5月の部分開館に至るまでの経緯を、国際子ども図書館準備室が館内に設置される平成9年1月までとそれ以後に分けて略述する。

<開館準備第一期>

東京都台東区上野公園の一角にある国際子ども図書館の施設は、帝国図書館として、明治39年（1906年）に建造されてから100年近い歴史をもつ施設である。第二次大戦後には国立国会図書館の支部図書館として利用されてきたが、将来は東京都に移管することが国立国会図書館法第22条で規定されていた。しかしながら、東京都における公共図書館が整備されてきたこと等の理由により、同館を都に移管しないことについて都との了解が成立し、平成6年7月1日に法律が改正され、これによって、国立国会図書館の施設として恒久的に活用する道が開かれることになった。これが国際子ども図書館設立の一つの出発点となる。

館法改正を受け、当館では支部上野図書館の将来計画の検討が開始された。この検討の視点は、(1)国立国会図書館全体の将来計画（平成14年秋に京都府に開館予定の関西館（仮称）の計画はすでに存在した）、(2)上野という立地条件、(3)庁舎の歴史的建築物としての意義の3点にあった。具体的な案として、美術・音楽分野の専門図書館、出版・印刷博物館等と並んで、児童図書館も候補の一つとされた。折しも、前年の平成5年には、読書推進運動団体等を中心とする関係団体が集まった「子どもと本の出会いの会」や「子どもと本の議員連盟」が発足し、子どもの読書振興や国立の児童図書館設置への機運が高まりつつあった時期でもあった。

館法改正後の平成6年末には、「子どもと本の議員連盟」から「国際子ども図書館設立の申し入れ書」が国立国会図書館長宛に、関連25団体連名で「国立国際児童図書センター設立に関する要望書」が村山総理宛に提出された。その後、衆・参議院議員による支部上野図書館の視察が行われ、両議院の議院運営委員会図書館運営小委員会や同懇談会で、「支部上野図書館に子ども図書館を設置することが適切である」という意見が大勢を占めた。これが、国際子ども図書館設置の実質的な出発点であったと言える。

しかしながらここに二つの難問があった。第一は、この支部上野図書館庁舎が永続的な利用に耐えることができるかという問題であり、第二は、そもそも国立の子ども図書館はどのような図書館であるべきかという問題である。

第一の問題については、建物の安全性と防災に関する技術的評価を得るため、平成5年度から3ヵ年計画で慎重な構造調査を実施した。また、この建物は残り少なくなった明治期洋風建築の一つとして、平成2年1月に東京都の歴史的建造物に選定されている貴重な文化遺産であり、平成8年度に意匠調査を実施した。これら二つの調査に基づいて、免震工法により現庁舎を保存するとともに、1階の玄関から



裏庭までと3階の裏側全面にガラス棟を十字型立体交差状に増設し、明治、昭和、平成の建物を一体化するという、建築家安藤忠雄氏の基本設計を得ることとなった。

どのような内容の図書館を作るかという第二の問題については、平成7年1月に、館内に検討会を設置し、同3月に「児童書の図書館」構想（試案）をまとめたのが出発点である。一方、館外では同5月に、作家、研究者、児童図書館関係者、出版社、読書推進運動団体等を糾合する「国立の国際子ども図書館設立を推進する全国連絡会」が組織され、同6月には「国際子ども図書館設立推進議員連盟」が発足し、当館に対してさまざまな意見・提案・要望が寄せられるようになった。

当館では、これら館外関係者のさまざまな意見を聴取するために、同7月、「国立国会図書館に設置する児童書等の利用に係る施設に関する調査会」を設け、施設、組織、運営、所管すべき児童書等に関する基本的事項について諮問し、同11月17日に答申を得た。この答申を受けて、当館としての「基本計画」策定に着手し、翌平成8年5月「児童書センター（仮称）基本計画」を策定した。

基本計画で示されたのは、仮称ではあるが名称を「児童書センター」とすること、その基本的役割として、子どもの読書環境・情報提供環境の整備を目的として、国内外の児童書と研究資料を広範囲に収集・保存し、子どもへのサービスの第一線にある図書館活動および調査・研究活動を支援する児童書のナショナル・センターとなることを標榜した。

一方、子どもの利用にも言及し、電子図書館機能を活用しネットワークを通じた全国各地の図書館や学校の施設における利用という非来館型サービスとともに、「子どもと本のふれあいの場」として展示、各種イベント、見学等の来館型サービスを掲げた。しかしこれに対して、「子どもが閲覧利用できない図書館ではなんの意味もない」という批判が寄せられた。

上述した全国連絡会を始めとした児童書・児童図書館関係者からの要望は2種類に大別することができる。一つは、納本図書館である国立国会図書館は、散逸・消滅しやすい児童書の収集・保存を積極的に行うとともに、それらについての目録・書誌作成にも力を入れ、全国的なレファレンス・サービスに応じて欲しい。児童サービスは地域の公共図書館や学校図書館が担うべきであり、国立図書館はそのバックアップサービスに徹して欲しいという要望である。第二の要望は、全国の児童図書館のモデルとなるような児童図書館サービスを実施することが最も重要な課題である、という要望である。

このように、館外関係者の意見にも大きな相違があったが、基本計画に盛り込まれた考え方にに基づき、開館記念式典のスピーチで皇后陛下が述べられたように、「直接子どもに奉仕するとともに、『子どもに奉仕する人々に奉仕する』という、この図書館に課せられた二重の役割」というきわめて困難な課題を引き受けることとした。その結果、平成8年12月に、「児童書センター」という仮称を変更し、「国際子ども図書館」を正式名称とすることに決定した。その名称の冒頭に「国際」という語を

冠したのは、国際協力活動を推進する国立図書館としての一般的任務に加えて、絵本をはじめとする児童書のもつ国際的性格を強調し、子どもたちの異文化理解の促進に寄与することを、同館の重要な任務として捉えたからである。基本計画についてはその内容は変えず、タイトルを「国際子ども図書館基本計画」に変更した。

翌平成9年1月には、支部上野図書館長を準備室長とする「国際子ども図書館準備室」を発足させ、具体的な開館準備の段階を迎えることになる。

<開館準備第二期>

開館準備第二期は、基本計画に従って、開館をめざしてまっしぐらに突き進んだ時期であった。開館時期の確定、施設計画、専門家・児童図書館関係者の意見聴取、サービス内容の確定、資料収集、総合目録事業の立ち上げ、目録作成、電子図書館構築、これらを可能とするための予算獲得、組織準備、法規制定等々、あらゆる開館準備をこの国際子ども図書館準備室が引き受けることとなった。

まず、できるだけ早い時期に一部の施設だけでも開館しようという方針のもとに、部分開館（平成12年度早期）と全面開館の2段階で行う方針が決定された。また、平成9年7月には、子どもの来館利用についての基本方針を確定し、現在の部分開館での施設計画とともに、1階は子どもの利用のフロア、2階は大人のためのサービス・フロア（資料室や研究・研修室等）、3階は大人も子どもも利用できるミュージアムとホールという全面開館後の施設計画を決定した。さらに翌平成10年6月には、この施設計画を前提として「サービス実施計画」を策定した。

これらの計画策定とともに、資料収集（選書・発注）、資料整備、システム開発、国内外の児童書のデジタル化、展示会企画・準備、海外児童図書館専門家の招聘、フォーラムの開催、旧支部上野図書館所管資料（博士論文等）の移送、工事のための事務室移転等々、連日のように異なる課題の解決と異なる作業を繰り返した。

このように、我が国初めての国立の児童書専門図書館を設立するには、あまりにも急拵えであった感は否めず、部分開館後の図書館サービスにも多々不備が生じているであろう。しかし多くの館外関係者の意見を聞きながらも、数少ない職員で走りながら考えた開館準備時期とは異なって、開館後は現実の利用者からの要望に耳を傾けつつ、歩きながら利用者と共に考えることが可能となっている。

図書館はローマと同様に一日でなるものではない。幸いなことに、納本制度による我が国の児童書の網羅的な収集、戦前・戦後の未収児童書の発掘・収集、海外児童書の広範な収集、子ども室で提供する資料の収集の予算・体制も確保されている。開館準備第二期に参画した元準備室員のひとりとして、これら収集した豊富な資料を活用しながら、よちよち歩きの図書館が、大人や研究者や子どものさまざまな利用者とともに健やかに成長してゆくことを願ってやまない。

和中幹雄（国内資料課長、元国際子ども図書館準備室員）

国際子ども図書館開館記念国際シンポジウム

抄録

子どもと本と読書

—21世紀の子どもたちのために今何をなすべきか—



2000年5月8日 国立国会図書館新館講堂

第一部 子どもと本と読書—各国からの報告—

- 司会 亀田邦子 (国際子ども図書館長)
- 報告 シビル・A・ヤーグシュ (米国: 米国会議図書館児童書センター長)
- ジュヌピエヴ・パット (フランス: 「本の喜び」図書館長)
- バーバラ・シャリオット (ドイツ: 国際児童図書館長)
- ヴァルシャ・ダス (インド: ナショナル・ブック・トラスト編集局長)
- ソンブシ・シンカマナン (タイ: 元スリナカリンウィロート大学教授)
- 宋 永淑 (韓国: ソウル読書教育研究会会長)
- 松岡享子 (日本: 東京子ども図書館理事長)
- 島 多代 (国際児童図書評議会〔IBBY〕会長)

第二部 国際子ども図書館開館にあたって—報告と討議—

- 司会 松岡享子
- 報告 亀田邦子
- 討議
- 総括 亀田邦子



＜講師略歴＞

シビル・A・ヤグシュ<Dr. Sybille A. Jagusch>

ドイツで小学校教諭として2年間勤務後、渡米。ボルチモア公共図書館の各分館で児童室長を務め、分館の運営に携わる。専門司書の資格を持って子どものためのプログラムの実施や資料構築のほか、分館の運営、経理、児童図書館員の育成など精力的に活躍。1973年メリーランド州立大学で児童文学を講義。1983年米国議会図書館児童書センター長となる。児童文学の専門家として、同センターの各種刊行物の企画、執筆、編集やスタッフの養成、議会図書館の児童書の蔵書構成の評価や収集にも携わっている。I F L A児童図書館分科会、アメリカ図書館協会児童サービス部会、I B B Y等でも活躍。

ジュヌビエヴ・パット<Ms. Geneviève Patte>

1960年パリ市立児童図書館「楽しいひととき」を経てミュンヘン国際児童図書館で研修を受ける。1961-1963年、フルブライト奨学金を得てニューヨーク公共図書館で研修。帰国後「本の喜び」図書館設立に関わり、1964年以降同館の責任者を務める。同組織が国立児童資料センターになるとともに、所長となり、付属のクラマール児童図書館長も兼任。この間、1970-1974年国際児童図書評議会（I B B Y）副会長、1980-1984年I F L A児童図書館分科会委員長、1983年アメリカU C L A客員教授、現在I F L A児童図書館分科会顧問。

バーバラ・シャリオット<Dr. Barbara Scharioth>

児童書の分野を中心とするジャーナリストとして活躍。1980-1988年ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学で児童文学研究の講座を担当。1985-1991年西ドイツI B B Y会長、1986年I B B Y理事、I B B Y朝日国際児童図書普及賞審査委員長となる。1994年I B B Y理事に再選され、1996-1998年I B B Y副会長を務める。この間、絵本に関する多くのセミナーやワークショップを組織し、多数の論文を発表。児童文学に関する雑誌の編集も行う。1992年ミュンヘン国際児童図書館の副館長、1996年から同館館長に就任し、多くの優れた展覧会や図録を企画。1998年国際児童図書館の特別部門としてミヒヤエルエンデ・ミュージアムを設置した。

ヴァルシャ・ダス<Dr. Varsha Das>

子どものための雑誌編集のほか、子どもの本の著作多数。それらは、ユネスコ・アジア文化センターのエコロジー・シリーズをはじめ、ユニセフ、ナショナル・ブック・トラスト等多数の団体によって公刊されている。英語及びインドの数種の言語の翻訳により国内と国際的な情報流通に貢献している。子どものためのラジオ・テレビ番組制作やアニメーションビデオの台本作りにも携わる。1980年以降、ユネスコ等の後援の下、文字を学ぶ人や学業の遅れている子どものための読み物の制作者のワークショップをインドや東南アジア各地で実施。いくつかの賞の選考委員も務める等、40年間、出版界に貢献してきた。

ソンブン・シンカマナン<Ms. Somboon Singkamanan>

高等学校の英語の教師となり学校図書館司書としても活躍。1971年以来、子どもの本と読書推進のための多様な活動を展開し、「児童書開発プロジェクト」の指導者となる。その一環として企画した「ポータブル・ライブラリー・プロジェクト（巡回文庫）」が、第2回（1989年）IBBY朝日賞を受賞。また、子どもの本と読書開発についてタイ国内及びアメリカで評論執筆活動を行い、16冊に及ぶ絵本作品も出版している。その他、数々の国際図書館関係会議など国際専門家会議でも講師として活躍。1982-1999年IBBYタイ支部事務局長。1999年末までスリナカリンウイロート大学教授。

宋 永淑 [ソンヨンスク] <Ms. Young Sook Song>

1969-1979年図書室、図書館等勤務。1981年以降徳成女子大学、忠南大学、漢城大学、ソウル女子大学講師を歴任し、1988年現代デパート文化センター読書教室開設。1996年ソウル読書教育研究会を結成し、会員教育、子どもの読書教育、公共図書館及びその他の社会教育機関へのボランティアに力を注ぎ、児童書の翻訳も手がける。1998年「本の日」記念読書振興賞受賞。現在梨花女子大学平生教育院、亞洲大学社会教育院講師。

松岡享子<Ms. Kyoko Matsuoka>

ボルチモア市イーノック・プラット公共図書館に勤務。帰国後、大阪市立中央図書館を経て、自宅で家庭文庫を開き、児童文学の翻訳、創作、研究を続ける。1974年財団法人東京子ども図書館を設立。現在、同館理事長、日本国際児童図書評議会（JBBY）理事。1992年、1994年国際アンデルセン賞選考委員。ユネスコ・アジア文化センター評議員。1970年より同センターが推進するアジア太平洋地域共同出版計画中央編集委員を務める。児童文学の創作、翻訳、エッセイ等著書多数。

島 多代<Ms. Tayo Shima>

至光社編集部勤務しながら世界の絵本の収集、絵本史の研究を開始。1981-1985年米国議会図書館児童書センター・コンサルタント、1987年から日本国際児童図書評議会理事等を歴任。1988年ミューゼ・イマジネール（私設絵本デザイン資料館）設立。1989-1991年ブラチスラバ国際絵本原画展国際選考委員。1990年から国際児童図書評議会理事、副会長を歴任。1994年以降、東京芸術大学美術学部デザイン科講師。1998年以降IBBY会長。

亀田邦子<Ms. Kuniko Kameda>

1964年から国立国会図書館勤務。1980-1983年派遣職員としてオーストラリア国立図書館に勤務。1984年から再び国立国会図書館で勤務し、1994-1999年支部上野図書館長、1997-1999年国際子ども図書館準備室長を兼務。2000年1月から国際子ども図書館長。国際子ども図書館については、1994年秋頃の構想の初段階から関与してきた。1999年からIFLA児童図書館分科会委員

第一部 「子どもと本と読書」－各国からの報告－

シビル・A・ヤークシュ

1987年、米国議会図書館児童書センターは日本の児童書およびテレビに関する会議を主催しました。日本からの来賓、東京子ども図書館理事長の松岡享子さんはその時「変わりつつある世界における日本の子ども」について話されました。集中力の低下、お話をあまり喜ばなくなったこと、そして時間の経過を非常に意識するということが、彼女の図書館の子どもたちに見られるようになったということでした。



松岡さんがおっしゃったことは、それから到来することの兆しだったのです。55年間に世界は大きく変わりました。60年代の初頭、マーシャル・マクルーハン(Marshall McLuhan)は、グーテンベルグの活版印刷がもたらしたのと同じ劇的な変化に、我々は通信コミュニケーションにおいても直面していると言ったのです。今や電子機械は我々の生活に押し寄せ、我々の生活を支配しています。いわゆる先進国に住む私達の多くはこれらの通信機器をほとんど毎日、使っているか所有しているのです。

『グーテンベルグへの挽歌 エレクトロニクス時代における読書の運命』という著書の中でスヴェン・バーカーツ(Sven Birkerts)は、容易ならざるパラダイムシフトを経験しているのだ、我々の集団的な記憶、そして本を通じてむこう一千年の間に受け継がれてきた我々の遺産が、失われる危機に瀕しているのだと言っています。彼は自分の学生が活字離れ、本離れを起こしていることを見つけ、学生が読書というものを時間がかかり、重要なことではないと考えているという点を指摘しています。つまり松岡さんが小さな子どもたちに見た現象と同じ現象を数年前にこのバーカーツも見たのです。

商業主義に支配されている現在、子どもが受ける影響によって、我々の文化は今後どうなってしまうのでしょうか。テクノ玩具や、商業主義によって薄められた文学に囲まれた子どもたちが成長したらいったいどんな大人になるのでしょうか。電子通信の普及によって、読書がもたらす「読む」という行為自体の喪失、バーカーツの言うところの“the reading state” 読書の状態、自分の内面に向き合う空間というものが喪失されつつあるというこの恐ろしい現実到我々はどう向き合っていたらよいのでしょうか。不必要な、役に立たない情報の大海に圧倒され、言葉や心が不毛になっていく現代において、我々は自分達のため、子ども達のために読書という空間を維持することが依然としてできるのでしょうか。

しかし、バーカーツが言うように文学、読書が死んだとは私は思いません。でなければハリウッド・ポッターシリーズが、アメリカの大人も子どもも虜にしたあの現象をどうやって説明できるのでしょうか。それこそ物語が生きているという証明にほか

ならないのです。しかしその物語を生かし続けるにはどうすればいいのでしょうか。

観世流の観世鏡之丞（8世）が“*In Search of the Spirit: The Living National Treasures of Japan*”『精神を求めて…日本の生きている国宝』の中で、過去のパワー、力強さというものが、古い面を通じて伝わって来るのだと語っています。これは活字にも言えることなのです。活字を通じて過去のパワーというものが我々のもとに来て、失われる危機に瀕している歴史、遺産を守るのです。この活字、読書、文学を守っていくべき我々の使命を次のエセル・ハインズ(Ethel Heins)の言葉によって確認したいと思います。

「技術がいかにインタラクティブなものであろうと、非常に人間的な現象である、苦悩、寂しさ、絶望、同情、機知、歓喜、愛といったものを伝えることができるか疑問に思う。この乱ればらばに崩れた世界の中で、この文学の体験の力強さを子どもに伝えるためには、子どもと本を結ぶものがなくてはならない。そしてそれはもちろん、知識があり、思いやりがある大人だということだ。その少ない幸運なあなた方にとって、これは今も真の天職であり続けると私は信じている。」

ジュヌピエヴ・パット

フランスでは多くの児童書が出版されていて、各出版社は児童図書部門を設けています。児童書専門の書店も増えており、子ども用の図書館もあります。これらの図書館は新しいテクノロジーの導入によって、メディアライブラリと呼ばれるようになっていきます。大型の図書館も多くの都市の中心地に建設されて、一見理想的な状況だといえるかもしれません。



しかし、いくつかの図書館を見てみると、子どもの図書館利用は減っています。なぜならば、その子ども用の図書館員の訓練が行われていないからです。また、公共の図書館、図書館員用の訓練もほとんど行われていないからです。そしてほとんどの図書館では運営や新しい技術に力点が置かれていて、私たちの職業の文化的な側面、人間的な側面が忘れられがちとなっているのです。

しかし医者、心理学者、精神科医、ソーシャルワーカーといった人たちが図書館の重要性をよく理解し、また図書館員の注意を促してくれています。彼らは読書、物語、文化にアクセスを持つことが、社会からの除外者を出さない方法であると考え、また周辺に追いやられた人呼び戻す方法だと認識しているのです。そして図書館というのが特別な空間であり、そして個人的な対話をするために重要な所であり、責任感を育成し、どのようにしたらいっしょに生活していくことができるのかということ学び、希望をもつために重要な空間だとしているのであります。私たちの職業のこの人間的な側面は彼らが言うようになります重要になっていくでしょう。読書というのは非常に個人的な体験を得ることができるのであり、特に大人と共有することができるすばらしい経験であるからこそ、彼らは図書館をできるだけ

広く開放しようとしています。そして周辺に追いやられて、自発的には図書館へやってこない人々のために青空図書館というものができたのです。

私たちの図書館は、パリ郊外の貧困層が比較的多い地域にあり、そこでは青空図書館を開設しています。天候の悪いときには出張図書館を設け、各家庭を本が入ったバスケットを持って回ったりしています。この経験からわかったことは、親も子どもも本や物語が好きであり、そして子どもにとって読む喜びがどのようなものか、私たちにとってもどのようなものかということをもう一度認識したことです。子どもは優等生のみならず、自分達のためにも本が存在するということをそこで発見し、本物の図書館へ行くようになるのです。これによって今までとはまったく違う状況が生まれるのです。そして彼らは自分達にも注意が払われていると気付くのです。

一方で、豊かな国ではあまりに物や情報が多すぎて、子どもに質問や好奇心の芽が出てくる前に与えられてしまい、本当に必要な情報に触れることができないという問題があります。この現象はコンピュータ、インターネットといった新しい技術の台頭によってますます増えているのです。子ども達は情報の氾濫にのみ込まれ、知りたいという気持ちをなくしてしまうのです。私がここで言いたいのは、情報が氾濫しているこの世界において、子どもに多くの本や情報を与えるのではなく、まず選ぶということであり、子ども達が自ら知りたいと思う気持ちを育むような魅力的でベストな本を与えるということです。それによって、子ども達の記憶に長く残り、自分との対話や本当の感情、他の子どもとの対話を引き出し、興味深い関係を育むことができるようになるのです。今の時代というのは皆があまりに急ぎ、多くものに囲まれています。その中で我々の役目とは、家庭で、図書館で、学校で子ども達に対して読書という個人的な経験を正しくさせ、お互いに読書の経験を交流し、考え方を実現する方法を教えることであり、それによって我々の社会は正しく機能することができるのだと思います。

バーバラ・シャリオット

私はドイツの視点から私の考えをお話したいと思います。アラビアの古い格言「書物というのはポケットに入れて持ち歩ける庭のようなものである。」という識見を私たちは子ども達にどのように伝えることができるでしょうか。この格言は読書を庭園での三ポイントになぞらえています。つまり文字、文章、そして考え、物語といったもの、書物のこういったものを、木や花を植えて、花や実を結ぶまでその成長を楽しみにする庭園の喜びと同じにとらえているということです。

こういった読書の楽しみを子ども達にどのように伝えるかという問いかけを北ヨーロッパで1970年代から非常に多く投げかけるようになりました。「子ども部屋の改革」と呼ばれる大きなメディアの開発があり、教育者、社会学者、そして文化



の専門家が激論を闘わせましたが、メディアによる子ども時代の影響がどのようなものであるかということの結論は出ていません。しかし私達は子ども達がさまざまなソースをもとにその社会を形作るものであるということをごここで認識する必要があります。そのソースの一つが本、読書であるべきなのです。

ドイツの国際児童図書館そして、国際児童図書評議会の創設者でもあるイエラ・レップマン (Jella Lepman) と私は、本によって子どもに影響を与えることが可能であるという思いをいっしょにしています。本というのは国家の文化的な宝であり、国家、さまざまな国々、民族、そしてコミュニティの架け橋になり得ますし、またさまざまな友情を培うことができます。私たち、文化的な意味での政治家、司書、そして教師として、先の格言の中にある識見を子ども達に伝えたいと思います。レップマンのライフワークとなったこの献身的な働きこそ私達の目指すものであるべきだと思います。

「少しずつ、この上下がひっくり返ってしまった世界を、子ども達への活動を通して建て直しましょう。」これはレップマンが1945年第二次世界大戦が終わってすぐに行った提言です。彼女は崩壊しつくしたドイツの窮状、特に子ども達の惨状、困難を目撃し、他の国々の児童書を文化の再教育のシグナルとして使おうという決定をしたのであります。彼女が著したメモワール『児童書という架け橋』を読んでもいただければ分かると思いますが、世界20カ国の大使館、領事館に向けて彼女は手紙を送り、本を贈ってくださいと頼んだのです。

時が流れ、時代は変わりましたが、良質な本に対するニーズは未だ変わりません。すばらしいドイツの作家で翻訳者である、ミリアム・プレスラー (Mirjam Pressler) の言葉を引用します。

「本がなければ世界には非常に狭い境界線しかありません。私達は多くの異なった本が欲しいのです。この本というのは我々と未知の世界を隔てる壁にあけた無数の小さな覗き穴の役割を果たすことができます。本によって外の世界の眺望を与えることができるのです。しかも1冊の本だけでは全容を知ることはできません。」

さて、ドイツでは毎年約5000冊の児童と青少年のための本が出版されています。出版社自らが選択してそのうち約10%の500冊が良質とみなされ、ドイツ青少年文学賞の審査委員会へ送られます。またドイツにおいては約2000の公立図書館がありますが、予算が削られて悩んでいます。90年代後半には主に図書の提供を行ってきましたが、現在では予算というのは全メディアに等しく配分されるようになっていたため、各方面からの競争に児童書は直面しており、明かに国際的かつ変化を続けるメディア環境という全体の脈絡の中で書物も捉えなければならないのです。

読書の普及というのは公立図書館の大きな仕事の一つとして、努力され、いくつかの全国組織によって支援されてきましたが、残念ながら読書離れは進んでいます。私は読書普及の成功というものは、教師や親たちとともに活動する専門家自らが熱心な読書家であり、かつ、本の持つかけがえのない力を信奉する人々であるときに

のみ、成功すると考えます。ドイツにおいて読書普及はまず、大人への働きかけから始まります。児童書の作家やイラストレータなどの情報を提供するのです。

さて、次はリーディングミュージアムの果たす役割について述べます。これまでよりはるかに私達は努力をして本と読書を擁護することが必要であり、そして、古いとか遅れたと言われないようにする必要があります。その一つの方法として、国際児童図書館はリーディングミュージアムという新しい方法を模索しています。第一の試みとして、ミヒャエル・エンデ(Michael Ende)ミュージアムを設立しました。彼の全作品を網羅し、個人的な蔵書、また個人的な宝石箱やパイプのコレクションなど作者の生涯と作品のつながりが偲ばれるものを展示しています。また、このミュージアムの最後には必ず訪問者が、エンデ自身が使った長いダイニングテーブルの朗読セクションで彼の本のページをめくります。そして資料館を出るときには、また彼の作品を読んでみよう、まだ読んでいない本も読んでみようとい心に堅く決めて去っていくのです。リーディングミュージアムは、多くのニーズを満たしています。保存のための公文書館であり、研究の場でもあり、個人の品々や文学的オブジェを公開し、展示する場所でもあります。国際児童図書館はまた、エーリヒ・ケストナー(Erich Kästner)の部屋を同じようなコンセプトのもとに開いており、最近ではジェイムス・クリュス・タワー (James-Krüß-Tower) の開館も考えています。上記のような数人の作家の作品やその他を収集して資料館とすることによって一般大衆を惹きつける、こういった試みを通じて国際児童図書館は21世紀に向けて新たな一歩を踏み出すのです。

遠くない将来、さまざまな文学がフルテキスト版として web 上で提供されるようになるでしょう。そして子ども達はコンピュータ上でそういった書物を読むこともできるようになるでしょう。子ども達が出会う多くのメディアそれぞれの違いを十分識別し、図書館においてそれぞれの特色を生かしながら子ども達に伝えていくというのが、これからの新しい図書館の引き受けるべき役目だと思います。それによって1冊の本はポケットに入れて持ち運べる庭であるという言葉の意味を理解する子ども、そして大人の数も増えていくことでありましょう。

ヴァルシャ・ダス

インド、またその近隣諸国のパキスタン、バングラデシュ、ネパールでの児童書や、読書普及活動の現状と課題について紹介します。これらの国々における読書とは、識字の世界に入るための三つのR、reading (読む)、writing (書く)、arithmetic (算数) の最も重要な要素であります。これらの国の地方の大半の人々、特に女子の識字能力の欠如という問題に対応しようとしています。インドにおける1993年94年の全国調査によると、5歳から9歳までの年齢層の地方に住む男子の32.7%、女子の43.7%、都市部で



は男子の15.9%、女子の19.6%が学校へ行っていないという結果が出ています。その結果、二つの大きなプログラムを展開することで、インド行政府は教育分野の状況改善に力を注いでいます。一つは人材開発省のもとでのナショナル・リテラシー・ミッションという運動、もう一方は世界銀行の資金供与による地域初等教育プログラムの設置です。これらのプログラムは出版産業界に大きな影響を与えました。インドでは2000の母国語と16の公用語があり、この公用語での出版物を出しています。ナショナル・ブック・トラストでは毎年400点の新刊、翻訳本、再版本を、13カ国語以上の言語といくつかの少数民族言語で、子ども向け、読み書きを覚えての人向けに出版しています。

一方パキスタンでは成人向けの教育プログラムは存在していませんが、政府が子どもの学習の補助用読書教材を作成しています。しかしその一部の本は高価で、個人では購入できない状況です。3年ほど前にユネスコ・アジア文化センターの指揮によって行われた調査によると、都市部の49%の子ども達、地方の57%の子ども達がこれらを求めているが入手できないという状況なのです。4カ国においては、勉強よりも仕事が優先されます。これはもちろん深く根付いた昔からの伝統であるということもありますが、また、地方に住む家族の経済的な事情がここには働いているのです。

一方で親の識字能力というものも子どもの教育、全般的な生活の質に大きな影響を与えます。インドでは成人の識字プログラムが成功した場合に、子どもの小学校への入学率も向上するという経験を得ています。全国識字プログラムにおいては、インドの各村に継続教育センターが設けられており、村全体の読書のニーズに対応しようと運営されています。

政府資金で賄われて運営されている組織、パキスタンのナショナルブック財団、バングラデシュのシユアアカデミー、インドのナショナルトラスト、そしてネパールのサージャー・プラカーシャ共同組合といった国レベルの出版活動は、特に途上国の多言語、多文化の社会においては大きな意味を持ちます。手頃な価格で、多くの言語、しかも広範なトピックを扱い、多くの年齢層向けに提供できるからです。

この4ヶ国では本の流通が非常に少なく、どの国においても地方においては効果的な図書館システムを持たず、NGOの図書館システム以外は公共の図書館システムを持っていないのが現状です。そのため人々に対し、移動式のパンのサービスを提供しています。4年ほど前にネパールは実験的に移動図書館を地方の村に派遣し、識字プログラムのサポートをし始め、政府はユネスコから大きな資金供与を受けながら、地方図書館プログラムを打ち立て、初等教育プログラムの全国ネットワークをそれにリンクさせました。インドにおいてはナショナル・ブック・トラストが国立児童文学センターを通して村レベルでの本の販売や展示を行い、教員用のオリエンテーションプログラム、都市部の専門家によるお話の時間や、民話の時間というのも設けられています。そしてこれらは全国識字プログラム、あるいは地方初等教

育プログラムで行われていて、それを補完する意味で州政府並びにNGOが本の普及活動を独自に行っています。

しかし、これらの国々では、現在の重要な要素としてのビジュアルメディアという視覚媒体の貧富による格差の問題と、一方では広い国土の迅速な通信手段としての有効性が、共存しています。また、増大する人口に教育プログラムや開発プログラムが追いつけずにいるという事情があります。しかも天災や軍事費の増大、不安定な政治などの問題も依然として存在するわけですが、21世紀が今の子ども達の世界であるという事実は変えられません。歴史を振り返ってみれば、憎しみを語る文学が生き残らないことは一目瞭然であり、子ども達の未来を美しく明るくものにするためにも、子どもの本は多様性の中の調和を強調するべきです。さまざまな思考、表現、そして行動において、人間性、人間味のあるアプローチが示されなければならないのであり、友情や楽観主義を語り、異文化、異文明の豊かさを説かなくてはならないのであります。来世紀は平和と寛容の世紀であるべきなのです。

私の夢、憧れは2000年以降の子どもの本が世界の人々をより近づけるように貢献することであります。これらの本は異なる文化、文明の架け橋となっていき、人々の心の宝物を発展させ、世界を最高に美しい場所にしてくれることだろうと思います。そしてぜひとも夢を実現しようではありませんか。

ソンプン・シンカマナン

私自身の40年にわたる、本と子どもの出会いをもたらすための旅路について話したいと思います。まず私の子ども時代の経験について話します。私は地方で、農民の子として生まれ育ちました。我々は貧しくはないが、質素な生活をしており、子どもの本というのは稀な物でした。小学校においては教科書のみが使われ、娯楽用の本、大衆的な物語、ラーマヤナのような古典文学というのは子どものためのものとはみなされなかったのです。子どもたちが本を読むことを許されなかったのです。幸い、私の両親は本を読み、母は字が読めない女性たちのために音読をしていました。私自身は母とともに寺院の僧侶が語る仏教の説話をよく聞き、そして自宅では母が友人のために読んだ本、あるいは私の道徳教育のために読んでくれた話を聞いていました。このように幼少の時から読書習慣の下地が形成されたわけですから、やがて、娯楽用の本を子どもに届けるということが私の夢になり、教員養成校へ行き、1960年に中等学校の教員になりました。副業として学校の図書館の司書になり、そして図書館にできるだけ多くの娯楽用の読み物を追加するようにし、また多くの読書活動をするようにしたのです。その後働きながら図書館学の修士号を取得し、1973年、大学に就職して、図書館学の講師になりました。そして定年の1999年まで、大学においても子どもの本と読書への関わりを継続して、児童文学の講義をしてきたのです。



次にタイの児童文学の現状について話します。子どもの大半は地方に住み、その両親は多くが出稼ぎに出て、祖父母と暮らしています。すべての子どもは小学校が義務教育で7歳から入学しなくてはなりません、幼稚園、保育所、あるいは中等学校にはすべての子どもが行くわけではありません。しかしながら、子どもを学校に入れたいという親の最終的な目的はより高い水準の教育の準備をしたいということであり、受験が激化している現状であります。

そのような状況ですが、一般的にタイの子どもは郊外や地方においては就学前に読書をする機会はほとんどありません。そして就学してからも読み物としては、唯一、教科書だとか、補助用の教材しかないのです。小学校卒業後は、中学へ進学する子を除けば、本を読む機会はかなり低くなり、しかも村に届くような割安の本は質が悪く、内容も形態も子どもには適しません。対照的に良質の本は大変高価でわずかな子どもしか買えない状況であり、その買い与えることができる親でさえ多くは、どういった本をどこで買えばいいかという知識を持っていないのです。また子どもに読書をさせる時の問題は、親あるいは大人が、子どもは教科書や補助教材しか必要としないと思込んでいるような状況があるということです。そして現実的にも学童には余暇の時間がほとんどなく、あったとしても読書以外のことをしたり、あるいは読書をするとしても漫画を好み、あるいはテレビ番組に関係したような本しか読みたがらないという状況です。

児童書の制作については、私がこの分野で働き始めた当時、子ども用の本の制作はまだ初期の段階にあり、そして今日ではかなり状況は改善していますが、文章にしてもイラストにしても質の高い本は高価で、その値段は中間所得者層にさえもやや高いのが現状です。

児童図書館サービスについては、タイの図書館におけるさまざまな活動を見れば子どもの読書を奨励しようという努力がわかっていただけだと思います。最も良い質を持っている図書館は総合大学の図書館であり、そしてさまざまな短大、中等学校の図書館が挙げられます。一方小学校の図書館の質は良くないといわざるをえません。公共図書館は都市部や街中にあるわけですが、子どものための良質な本はそろえていません。国立図書館は子どもの部門を持っていないのです。

児童文学専門の施設としては、児童文学講座は多くの初等教育教員養成講座あるいは図書館学のカリキュラムに設けられており、私のスリナカリンウィロート大学においてさまざまなプロジェクト・プログラムを立ち上げました。これらは子どもの本と読書を促進するためのプロジェクトで、たとえば子どもの読書プロジェクト、そして伝統に基づく作文プロジェクト、子どもの本の評価プログラム、そして児童文学ショーケースプログラム、巡回文庫プログラム（1989年IBBY朝日賞を受賞）などです。それ以外にもタイラオス若者の本のためのプログラムという共同プログラムがありますし、ワークショップとしてはストーリーテリング、読書アニメーション、創作作文などが行われています。これらのプロジェクト、プログラムは

互いに補完し合うものであり、また大学の目的である教育、研究、そして社会奉仕の目的をかなえるのに役に立ちます。児童文学プログラムは独立した学部として学校の中で発足し、児童文学の専門家を育成してきました。そして彼らは今さまざまなすばらしい活動をしているのです。

すでにお話しした活動というのは、子どもの本や読書を解決するのに役立てたと私は思っています。私はタイにおいてはさまざまな読書普及活動をしています。この国際子ども図書館にもたくさん子ども達がやってきて、本を好きになってくれることを願っています。大人達は、世界中で手をつなぎ、赤ちゃん達に子守唄を歌うべきであります。子どもに本を読んで聞かせ、そして物語を聞かせてあげましょう。そして読書をいっしょに楽しみましょう。子ども達がさまざまな活動を通して、読書により心の喜びを得られるように願っています。

宋 永淑

韓国の読書事情について説明するために、私の読書体験を話したいと思います。私が小学校に入学したのは1954年で、読んだ本というのは、家庭に本があまりなかったため、教科書だけでした。58年頃には町の貸し本屋でよく本を借りるようになりましたが、図書館に出会ったのは中学生になってからでした。学校図書館で私はさまざまな本を読むようになったのです。私の学校はソウルの中心部にありましたが、その頃の周辺の本屋には子どもの本は置いていなかったように記憶しています。最近ソウル市内に大型書店ができ、90年代の初めにはチョパンといった児童書専門の書店が多く生まれました。



私は1987年ごろから積極的に子どもの本に深く関わるようになりました。この頃でも韓国では子供向けの作品は国内海外のものも含めてまだまだ少なく、絵本らしい絵本が出版され始めたのは1992年に入ってからでした。90年代後半には児童書専門の出版社もできて、外国作品の翻訳本や国内の作家のオリジナルな絵本が出版されるようになりました。その後、児童書の出版は活発化し、特に絵本の出版は流行となりました。

一方、図書館の事情についてですが、当初ソウルは人口が一千万を超える大都市でありながら、公共図書館は分館を含め2館しかありませんでした。70年代に入って4館、(うち私が79年まで働いていた正読図書館は77年開館)、80年代にはいって10館、90年代に5館と1分館が作られました。現在ソウルには国立中央図書館と分館、国会図書館、市立公共図書館の21館があります。

子供向けサービスは80年代になってやっと閲覧室を各図書館が置き始めるようになりました。89年には就学前児童も受け入れるようになり、79年5月にはソウル市立子ども図書館もできました。一方で、以前は子供向けサービスをしていた国立中央図書館の分館は学位論文館となって、今現在も国立では子どもサービスをしてい

ないのです。韓国ではまだまだ、本や読書のことを話題にすると、図書館のことではなく、本屋のことを考える人が多い状況です。特に地方では図書館に読書についてのサービスプログラムがろくに設けられていない状況なのです。お話の時間でさえ定期的に設けられている所は少ないのです。しかし、読書についてのプログラムが韓国に一つあります。それは夏休み冬休みを利用した「読書教室」です。

これからの子どもをどのように育てればいいのかを考える時、読書教育の観点から考える基本的な留意点を押さえておきたいと思います。まず、識字教育と読書教育は別だということです。文字の読み書きができるからといって本に書かれていることが十分に理解できる力があるかどうかは別の問題なのです。読書にとって大切なのは読み書きよりも聞く力、話す力であり、文字よりも言葉に対する感覚を磨くべきなのです。そのためにさまざまな話を聞かせる機会を増やし、想像力を豊かにすることで培われていく言葉が何を意味するのかと想像することができるように育てていくことができます。たくさんの読書経験によって読書や本の世界に浸りやすくし、文字を習う前にいろいろなことを見て感じる経験をすること、そしてお話を通じて想像力や語彙力を育てることが読書教育の基本だと思います。また、教育という名のもとに枠をつくって子どもたちを閉じ込めてはなりません。子どものやわらかな発想が継続していけるように読書を導いていかねばなりません。私はこのような考えのもとに、理想的な子ども図書館を作りたいと思っています。そのような図書館を中心に子どもにより読書環境を与え、読書推進のための望ましいプログラムを開発したいと考えています。また外国との交流を通じて子どもの本、読書、図書館についての広いアイデアを分かち合って行けたらと思っています。

松岡享子

日本の子どもの本や読書のこの50年は良い方向への大きな発展があったといえます。例えば児童書の出版は50年前と今とを比べると、比較にならないほど豊かになりました。出版件数が増え、扱う主題も広まり、対象の年齢にも幅ができて、内容も豊かになってきましたし、印刷や製本もずいぶんよくなりました。そして世界的に見ても日本の児童書の出版は恐らく最も高い水準をいくものでしょうし、今お話しになられたアジアの国々の状況に比べると格段にすばらしい状況が作り出されていると思います。そして、図書館や学校図書館の発展、公共図書館の普及の50年間の変化は実に目覚ましいものでした。その中で、開館式典の皇后陛下のお言葉にもあったように、戦後の子どもの世界を支えてきた子ども文庫活動という、日本に実にユニークな活動がありました。それが70年代に大きく広がり、図書館の数が増えた今でもいろいろな形で活動を広げています。また親達も読書を薦めることに積極的です。今の子ども達はテレビを見な



いで本を読めば、親はとても喜ぶでしょう。またいろいろな人が、子どもが読書から離れているということを心配しています。そして国が子ども読書年を定めたことや、国際子ども図書館を設立することを決めたということも、子どもが本を読まなくなることへの懸念や、もっと本を読んでほしいという願いや期待を国も政策として持つようになったということを示しているのです。しかし、このように外的な条件がよく整ってきた一方で、肝心の子ども達がよい読者として育っているか、あるいはそのための環境が整っているかどうかということを見ると、そこには大変大きな問題があると言わざるを得ません。この50年間に私達の生活は非常に大きく変化しました。まず、子どもの数が減り、核家族化しているということ、あるいは産業構造が変わり、第一次産業の人口が劇的に減って、第2次、3次産業への変換が行われているということ、生活の隅々まで機械化が進んで生活のスピードが昔とは比べ物にならないほど速くなり、皆がとても忙しいと言うようになったこと、そして、自然の環境が失われて代わりにテレビやその他の人工的な娯楽や情報の手段が隅々まで浸透してきたことといった、大きな変化が私たちの生活に起こって、それが子ども達の生活や心の有り様や、子ども達の物事に対する態度などにとても大きな影響を与えていると思います。これらの大きな社会の変化は子ども達がよい読者に育っていくための条件をむしろ奪ってきているのではないかという気がします。時間が無くなってきて、静けさがなくなり、それから子ども達が、あまりにもたくさんものに取り囲まれていて、そのために自分から外にむかって働きかけようという意欲を失われていることなどが一般的に見られるようになりました。

ヤークシュさんの話の中に、“reading state”という言葉が出てきましたが、読書をするのにふさわしい状態、つまり子ども達がよい読者に育っていくのによい環境を提供することが今の社会には非常に難しくなってきたという事実があります。新しいメディアの問題が急にクローズアップされ、コンピュータゲームなどの世界に商業主義が入り込んできているという状況があります。だから日本のこの50年を大雑把につかんでみると、子ども達が読書するための状況がよく整ってきたけれども、子ども達のよい読者に育っていくための内的な条件がとても難しくなってきたと言えます。そして何年もの間一生懸命文庫を運営してきた人、いろいろな困難な状況の中で児童奉仕をしてきた図書館員達が、ここへ来て戸惑いを感じているのではないかと思います。終戦直後の、未来はよくなるであろうという希望を抱いて元気に働いていた頃に比べて、今は皆が少し立ち止まってお互いに顔を見合わせて、どうしたものかと悩んでいるような状況なのではないでしょうか。このような時期に国立の子ども図書館ができることになりました。これから社会も変化していき、子ども達もある意味では変化し、ニューメディアによる情報革命がどんどん進行する中で、子どもの読書をどのように考えていったらいいのかという時に、非常に大きな局面に、今私達が立たされているように思います。

亀田さんより出された課題は「子どもにとっての読書の意味をあなたはどうか考え

るか」でした。1965年に出版された『子どもの図書館』という本の中で、石井桃子さんは「これからの子どもは今までの子どもに比べて本を読まなくてよいのか、読まなければならないのかという点では、私は読まなければいけないという立場をとります」とおっしゃっています。私も今のような現状でなおかつ子どもが本を読まなくてはいけないのかと問われると、やはり、本を読んだほうがよいと答えたいと思います。石井さんは続けて、「子どもの読書の意味といいますか、子どもが本の世界に入って得る利益は大きく分けて二つあります。一つはそこから得たものの考え方によって、将来複雑な社会でりっぱに生きていけるようになること、もう一つは育っていくそれぞれの段階で心の中で楽しい世界を経験して大きくなっていくことだ」とおっしゃっています。このことは今も、これからの子ども達についてもおそらく当てはまることではないでしょうか。私は加えて、読書の意味というものをイメージを作ることから考えたいと思っています。文化人類学者、藤岡嘉愛が「人間はイメージタンクである」と言っています。人を動かしているもの、人となりを作っているもの、それはその人の中にあるイメージだと言っています。肉体が食べ物によって日々養われなければならないように、私たちのイメージも何かによって養われなければなりません。それはありとあらゆる経験が子どもたちの中に入ってくる時に、それなりのイメージを作ることに関わっていくことになるわけですが、私はいろいろなイメージの源として本の中に一番良質なイメージの源があると思います。そのためにこそ子ども達に本を読んでもらいたいと思っています。それからもう一つ、本を読むという行為そのものが持っている意味について話します。先週の朝日新聞にレジス・ドブレ (Regis Debray) というフランスの哲学者の話が載っていて次のようなことが書いてありました。「情報革命によって、いくら地球が狭くなくてもドン・キホーテを読むのに必要な時間は昔も今も変わらない。空間はちぢんでいくのに一日の時間は変わらない。そのために人間が思索したり、記憶を確かめたりする余裕を失ってしまう。それが人類の危機になってしまうのではないかと。読むということはある時間を精神活動のために取りのけること、あるいは自分の生活の中のある部分を思索したり、何かを記憶に刻み付けたりすることのために使うということなのではないかと思います。“reading state” は、読書することによって、逆に読書をするために必要な状況を内的に作り出すということではないでしょうか。内的な世界を持ったり、精神的に深く物事を考えたり、感じたりするというようなことのために必要なメンタリティが、読書という行為そのものによって養われる部分があるのではないのでしょうか。だから、これからどんどん忙しくなって、横の距離が狭まって、世界の隅々で起こっていることが判るといような横糸は放っておいてもどんどん進んでいきますが、ではその報道されたいろいろなでき事の背後に何があるのかということを知るための縦糸を強くするようなものは、やはり読書によってしか養われないのではないかと考えます。その意味で物事を考えたり、感じたり、背後にあることを思い巡らしたりするような、メンタリティを作

り出すことに、読書という営みそのものの力があると思い、そのことのために読書が大切だと考えています。そしてよい読者を育てることが難しくなっている時代にあつて、国際子ども図書館ができるということ、そして世界の各国で同じような目的のために同じような困難に立ち向かいながら働いていらっしゃる方たちと、こういう共有の場を持たせた事を大変嬉しく思っています。

島 多代

私の立場がここにいらっしゃる方々と違うのは、私がIBBYという会をしており、いわゆる繋ぐ役割であるということです。そのIBBYがどうして存在するのかという、皆様の多くがお持ちの疑問にまずお答えすることから始めたいと思います。それがなぜ本を読むのか、という答えについてのヒントがどこかにあるということを期待して、まずIBBYの創立について簡単にお話したいと思います。



シュツットガルト生まれの女性ジャーナリスト、イエラ・レップマンは、第2次世界大戦中ユダヤ系であったために英国へ亡命していました。戦後廃墟と化したドイツへ戻り、そこで子どもたちに見た最大の欠乏が、精神の支えでした。「子ども達のために本をください」と彼女が世界に呼びかけると、人生の中で本が伝える精神の糧を知る人々が真剣にその叫びに応えたのです。当時二つの大戦を経て平和の実現の難しさを身にしみ感じていたヨーロッパの多くの人々の中に、政治の世界の限界を突きつけられ、人類共存の最後の希望を本を通じて子どもたちへ託すことに全身全霊打ち込んだ一人のずば抜けた女性の資質と実行力に注目し、連携したいと思う人々が出てきました。1953年のIBBY発足に先だつて、ミュンヘンで1951年に準備集會が開かれ、当時、ミュンヘン大学の客員教授であり、人間の人格的生命力を中心とする文化の確立を唱え、欧米の教育界にも影響力をもつスペインの哲学者だったオルテガ・イ・ガセット(Ortega y Gasset)がレップマンに懇望されて、この準備集會に講演者として出席しました。

「人間の生命の機能には、三つの重要な区分が必要です。第一は道具、機械をつかう機能、第二は生命を自動的に維持する器官の働き、第三は人間一人一人を生き生きとさせる基本的な命のきらめき(生氣)、それは知覚と感覚、勇氣と好奇心、愛と憎しみ、楽しみや挑戦への願望、自己と世界への信頼、思い出、不思議さを感じ礼拝心を喚起される受容力です。教育とは、子どもの中にある、第三の機能であるこの内的存在の訓練に他なりません。子どもは、大胆に、寛容に、野心的に、情熱的な感情の中で育てられるべきです。ヘラクレスやオデッセウスのような神話の主人公は、子どもたちにとって完璧です。すべての神話と同じように彼らは無尽蔵な情熱を生むからです。」

先ほど松岡さんが触れていましたが、この後に、オルテガは「ドン・キホーテは

子どもには合わない。」と言っています(笑)。だからそこはいろいろな議論があったわけですが。彼は当時(1950年頃)の教育状況についてこう言っています。

「時代と共に歩みたいと考えている教育者にとってこの数十年の地平線の広がりは大きなものです。ヨーロッパにおける過去の一時的政治体制は、現在のすべて政治的なものへの軽視にとって代わられてしまいました。教育は政治に適合させる必要はなくなり、むしろ政治が教育に適合していかねばならなくなるでしょう。ずっと昔にプラトンが夢見たように。また、教育者は学校において、文学よりも新聞に優先権を与えるかもしれません。しかし、新聞に表現されていることは人生の意図とは関係なく、それはむしろ純粋に単純に社会の表面に日に日に変化する状況を伝えるものです。より深い、より人格的な、人生の重要な様相はほとんどすべて排除されます。教育の課題とはいつもこれが限界を持つものである、ということです。」

また、オルテガは子どもについて次のように語っています。

「我々成人が現実を参考にしながら行動する中で、子どもはその精神のよりどころにおいて、何ら確信を持たずに行動することができます。しかしながら、教育はいつも子ども時代の翼を切ろうとしてきました。大人の世界は子ども時代を妨害し、抑圧し、手足をもぎ、その精神を歪めてきました。しかし、成熟ということや文化というものは、大人や賢人が創ったものではありません。それは、子どもや私達の中にある未開の部分が創ったものであるということ覚えていてほしいのです。子ども達がいつか大人になるということをできるだけ完全に忘れて、子ども達を育てましょう。最良の人間は子どもらしさがなかった人からは決して生まれず、心の中に子ども時代の豊かな宝を失わずに持ち続けている人をいうのです。その昔、プラトンが語ったように、我々は自分の中の子どもを決して死なせてはいけません。」

「成熟ということ、子ども時代の終了ということではなく、子ども時代を携えていくということです。詩人の詩、また賢人や天才的な政治家の言葉は、長い長い間牽制されていた末、押し出され、鳴り響きたいという願いを込めた、永遠の子どもの声のこだまのようなものです。」

彼の熱烈で確信に満ちたこの講演は、第2次世界大戦後のヨーロッパで人間社会のあまりの脆弱さに打ちひしがれていた多くの参加者に深い感動を与え、その後レップマンを始めとするIBBYの創始に関わった人々の普遍的な共通基盤となったのです。

いまだに教育の問題で悩み、世界中で戦火を消し得なかった50年後の現在、私たちはIBBY設立時のオルテガ・イ・ガセットの言葉を忘れるわけにはいきません。遠い昔から、人間は考え、歌い、喜び、悲しみ、思い、生き死に、そのさまざまな生き様を物語、ドラマ、詩、絵、音楽などによって伝承してきました。これらを満載して子どもの本は、彼らが人生の道のりを歩きつづけるために必要な、智恵と勇気を照らす灯火として、手渡されるものではないでしょうか。このどの時代にも、どの地域にもあった人間の精神の営みは、いまでも続けられています。IBBY

は、人類が共有すべき人間の精神活動を担ってきた人々の間にネットワークを張り、お互いに励ましあってきました。国際アンデルセン賞、IBBY朝日児童図書普及賞、国際子どもの本の日、IBBYオナーリスト、IBBY障害児図書館、機関誌「ブック・バード」を通して、IBBYは今、しっかりと世界の多くの仲間たちと結ばれています。今日、ここにご出席のスピーカーたちも全員IBBYと深く関わっている方々です。いずれの時代にも、新たな困難をきりぬける鍵として、子どもたちに本を手渡すことを使命とする限り、私たちは自分の仕事が決して楽になることはなく、終わることもなく、しかし、限りなく生きがいに近いものだということを実感しているのです。IBBYは21世紀にも国境なく、本を手渡す人々の集まりとして重要な任務を負うことになると思っています。



休憩中、講師と語らう来場者



講師の方々が持参して下さった海外の絵本を手にとる来場者たち

第二部 国際子ども図書館開館にあたって—報告と討議—

休憩をはさんで、第二部では、松岡享子氏の司会で、国際子ども図書館についての報告や討議が行われた。まず国際子ども図書館とは何であるか、なぜできたのか、そしてなんであろうとしているのかということについて報告がなされた。

亀田邦子

先ほど、松岡さんから日本の図書館、子どもをとりまく状況、特に図書館や文庫などの子どもの読書にまつわる状況が紹介されましたが、日本では子どもが本を読むための図書館が充実している、本がたくさん出版されるという状況がありながら、一方では子どもがじっくりと読書をする、いい読者に育つという環境が整っていない、本を読む子はたくさん読むけれど、読まない子も非常に増えているというギャップの中にこのプロジェクトの構想が出てきたと考えます。もともとは、ここ数十年、子どもが本を読まないという状況を何とかしなければと、真剣に考えていた大人たちが、これは国として取り組むべき重要な課題であるという認識のもとに、非常に熱心に動いて政治家まで動かしてここにきたという、非常にめずらしい現象ではないかと思います。



個人の文庫、ある地方自治体の図書館ではなく、国を動かしてこの子どもの本に関する専門の図書館をつくった、しかも、財政の厳しい状況の中でこういうことができた、ということは非常に大事なことだと思います。21世紀を生きる子ども達のために20世紀の子ども達の置かれている状況の反省にたつて、贈り物としてこれはつくられるのだと、そういう意識を持ってこのプロジェクトに関わっていたすべての大人が取り組んできたのです。子どもにとっての読書の意味は、先ほどそれぞれの方がそれぞれの国の状況の中で、本質的なことを述べられました。それに対する認識を基本にして、国が取り組んでいくべきことと判断してここまでできたのだということが非常に大きなことだと思います。この子ども図書館をどういう性格のものにするか、何をするためのものであるかということについては、関係者の中でさえも十分に合意に達したということではありませんが、それぞれがそれぞれの立場にたつて考えながら、歩みながら今の形を実現したのです。

では国立であることの意義や役割は、何でしょう。子どもが本を読むことを盛んにしていくことの基本は、子どもの一番身近な図書館、環境というもの的大事です。

国に一つすばらしい図書館があるということがすなわち子どもの本の読書環境が整うということでは決してありません。そういう意味で国立であることの意味というのはやはり、他の図書館をつくることとは違います。その国立であることの意味を私は三つあげられると思います。

一つは資料と情報ということです。子どもに関する本も含めた子どもの本や、そ

の情報に国が取り組むことによって、日本中の子どもの本がすべて、そして日本だけではなく、世界中の子どもの本がここに集まってくるということ、こういうものを土台にして子どもの本の図書館サービスや、子どもの本にまつわるさまざまな活動を支えていけるようになる、それはまさに国でなくてはできないことだと思います。

それから国の中央の図書館としてできたこの国際子ども図書館は、国際的な意義を持ちます。世界的な意味での役割とはまず、各国のナショナルセンターや子どもの読書普及といった真摯な取り組みを続けている方々と手を携えて、—これはIBBYの活動とも繋がると思いますが—子ども達に本を手渡すためのいろいろな役割を担っていく、大きなサービスにしていくということです。もう一つ国際的な意義として、子どもの本を通しての異文化理解に貢献するということがあります。アジアの一員でありながら、日本の子どもは隣の韓国の事情も十分に知らないという状況にあります。それからダスさんのインドの国などについても日本の子どもは詳しく知らされていません。それを子どもの本を通して小さいときから異文化を理解する、日本の子どもの本を通して外国の子どもが日本を理解する、そういうことのための基本的な役割を果たすことが国の施設ならばできる、そしてしなければならないと認識しています。

それから、電子化時代の読書ということに関連して、国際子ども図書館では、電子図書館という取り組みをしています。電子図書館とは、本と対立するものとして存在するのではなくて、子どもに本を開かせるということをより効果的にするための一つの方法として、そういう仕組みを使っていくというように認識しています。子ども達が活字だけではなく、さまざまなメディアに囲まれている今日、そういうメディアをとり込んでいくことも大事でしょう。これにはやはり、システム開発やさまざまな基本的な手立てを講じなくてはならない部分があります。それを国の役割として、皆様に期待されている部分だと考えています。こういうことも、国立だからできること、国立だからこそしなければならないことであるのではないかと思います。

さらに重要なこととして、この図書館に課せられた役割が二面性を持っているということを申し上げたいと思います。一つは、子どもに本を手渡すのは大人の役割と先ほど触れておりましたが、その大人が子どもに本を手渡すための活動をするのをバックアップするということです。支援する、活動の拠点となるという意味での大人へのサービスをする、「子どもに奉仕する人に奉仕する」という大人へのサービスという役割の一つ持っているのです。

もう一つは子どもへのサービスです。子どもの本を基本に置く図書館として、子どもへどのようなサービスをするか、その部分を削ぎ落としたナショナルセンターというのも世界には結構多く見うけられますが、日本においては子どもへのサービスという部分について、大人へのサービスと同等に大事なものとして考えていこうとしています。ただし、子どもへのサービスは、日々、子どもが来て本を読む図書館としてのサービス、地域の図書館としてのサービスではなくて、「子どもと本のふ

れあいの場の提供」という、子どもが本をもっと読むためのきっかけをつかんでもらうという意味での役割を想定しています。それはシャリオットさんのリーディングミュージアムというミュンヘンのそういう役割にかなり触発されています。豊富な資料と電子図書館機能を使うということ、国際的な側面を持っているということによって、子どもへのサービスが、子どもと本のふれあいの場、子どもに読書をするきっかけを与える役割を果たすということが、非常に有効なのではないかと思っています。それから上野公園にあるあの建物に来るとということのほか、日本の国立図書館として、どの子も平等にサービスを受けられるようにということで、電子図書館機能、例えばホームページを開設することによって、あの図書館が持っている子どもの本についての情報、資料というものにアクセスしやすくするというサービスを考えています。この二つの側面を持つということが、このプロジェクトに関わっておられた多くの方々のご希望でした。もちろん、国立の図書館として一番大事なものは、資料をきちんとそろえて、それを整理していつでも使えるようにし、大人をサポートすることこそ第一義的な役割であるという声があり、同時に、子どもへのサービスを合わせてやっていくことが基本になれば、子どもの本の図書館のサービスのサポートができないのだという声も多くありました。その結果として、私たちはこの二つの側面を持った図書館をつくったわけです。このことは、ややもすると、非常に中途半端な性格になるという危険性も持っているし、なかなかそれぞれが十分なサービスにならないという恐れがあります。まだ誕生したばかりでわかりませんが、こういう二つの面がそれぞれに充実していくように、いい関係でこの二つが有効的に機能していくような図書館にしていきたいと思っています。

ここで国際的という面を考えてみたいと思います。アジアの一員としての日本に設立された子どもの図書館であるということの意味を非常に重く受け止めています。さきほどアジアの三つの国からのご報告がありましたが、欧米の国の紹介とはかなり色彩が違っていました。子どもが本を読むことが大事であれば、どの子も本を読めるように、そういう時代が来るように日本がアジアにおいて果たすべき役割はとても大きいと思います。私たちがすぐにいろいろなことができるとは思いませんが、アジアの資料をたくさん集めていきたいと思っていますし、アジアで子どもが本を読めないような環境を、少しでも読める環境にしていくような、そういうことのためのお手伝いになることをやっていきたいと考えております。私たちが手伝うだけではなくて、もちろんそういう国々で今ますます素晴らしい活動をしてこられた方のお力を借りるという側面を持っているということ踏まえていなければならないでしょう。アジアだけではなくて、世界ということをももちろん考えなくてはなりません。特にアジアを重要に考えているということをお知らせしました。国際子ども図書館が何なのか、何であろうとしているのかということは、これで十分であるとは思いませんが、こういうことを目指した図書館になっていこう、そうしたいと思っています。

ご承知のように5月5日にオープンした国際子ども図書館は、建物もまだ三分の

一しかできていません。これから全体ができるまでの2年間は非常に部分的なサービスしかできませんが、10年20年30年をかけていずれ、創立50周年をむかえたミュンヘンの図書館が到達したすばらしい地点まで、私どもの図書館も到達できるように努力していきたいと思います。

<ナショナルセンターの意味・役割>

松岡：ここにご出席の方々と、ナショナルセンターをお持ちの国、ナショナルセンターの機能を持つ国の方々に、国立の機関があることの意味を、ご自分の仕事の経験からどういうところで国立のあることの意味を強く感じていらっしゃるか、コメントしていただきたいと思います。

ダス：ナショナル・ブック・トラストは1957年に創設されました。本をインドの言語で提供していく、それらの本が手頃な価格である、そして読書習慣を人々に育成できるような本を出す、さらに読書普及活動をするを目的に設立されました。現在、年間600の新刊を発行し、19のインドの言語で出しています。ブックフェアを全国で展開し、民間の出版協会などによる地域のブックフェアの開催を助けていましたが、現在は多くの協会が自立して、ブックフェアを主催するようになりました。かなりの本や図書館はありますが、積極的に利用しないので、ブックフェアを主催するのは人々の利用を促進するのに非常に良い役割を果たしています。2年に一回、国際的なイベント、ニューデリーにおけるワールドブックフェアを、それから毎年ナショナルな、国レベルのフェアを州都において行っています。年間を通して地域、地区レベルでのブックフェアもやっています。ナショナル・ブック・トラストは本を手頃な価格で提供し、かなり大きな運動を政府によって展開しています。そして読書普及を学童の間で展開し、国の識字率向上プログラムも展開しています。また、児童文学センターにおける研究と、その調査結果の文章化作業が進んでいます。そして、地方において学校の教師に対してオリエンテーションのプログラムを実施し、小学校でどのように読書室を開設するかということをお教えします。子どもが読書の時間をとるということが意図的に行われていないので、それを体系的に教えようというわけです。このキャンペーンは地方においても人気がありますし、都市部などにおいても設置されています。政府系の学校でも読書コーナーがない学校もたくさんあるので、大規模な形でこの運動をしています。また、ナショナル・ブック・トラストでは子どもの文学に関してさまざまな形で月例の会議をやり、図書館員や作家、学校の教師などが参加して児童文学に関する問題についての話し合いをしています。そしてこれらの会議の議事録などを集めて編集して、全国にプロモートしています。

松岡：インドでは一つのパブリッシャーが何ヶ国語もの本を出すことが難しいためナショナルであることの意味が非常にはっきりしていると思います。ナシヨナ

ル・ブック・トラストの中の子どもセンターがやっている役割、国の大きな規模でやっているブックフェアなどはやはり国でなければできないことだと思います。そういう意味で国らしさというものが発揮されているようです。他の国の方はいかがでしょうか？パットさんは何かナショナルセンターということの意味についてお話しすることはありますか？

パット：私はナショナルな組織について言及したいと思います。そもそも政府が児童図書館を作るというとき、児童図書館とナショナルな機関の結びつきがありました。図書館を作るというアイデアを考えると、ネットワーク作りをするべきだと考えたのです。当時、児童図書館員の数は少なく十名以下でしたが、ネットワークを作るべきだと考えたのです。そして児童書すべてを調査して児童図書館にどの本を入れるのが適しているのかということを考えるべきだと思ったのです。つまりナショナルなネットワークを作り、それぞれの経験を交流しどのようにして本を選ぶのか、どのようにして本を読むのか、子どもにどう受け取られているのか、という情報を交換することとしたのです。例えばそこから刺激を受けて雑誌を出版したり、グループブックレビューをしたり、書評を書いたりということに繋がったのです。また、私のところでも生涯教育、継続普及教育といったものを児童図書館員向けにも行っています。パリのセンターでは納本制度が整い、出版された本すべてを集めています。これは児童書のみならず、出版された本をすべてここで集めています。現在のところ、出版社が資金を出してくれているわけですが、そのもつで、本を集めています。そこに行けば借りることができない場合でも探すことができるということです。日本の状況つまり、「文庫」というものも私どもの参考になりました。私どものナショナルセンターでは他の国立の機関とも連携してやろうとしていて、国内の部分、国際的な部分という二つの意味もっているのです。

松岡：ナショナルセンターには、一つには国内のいろいろな図書館を繋ぐ役割をしているということ、あるいは納本制度によって、全部の本を見られる場所を確保するという、外国に対してもその国の国際交流の窓口になるという役割が課せられているということが分かったと思います。アメリカのLCの場合はどうですか？ナショナルセンターという役割について何かあるでしょうか？

ヤークシュ：パットさんのおっしゃったことについて私のほうからも申し上げたいと思います。議会図書館の児童書センターは他の児童図書館と同じように、図書館に対するサービスをしています。図書館のために提供する情報がますます多くなってきています。そして、資金調達というものが私達の仕事の重要な部分を占めるようになってきています。図書館というのは確かに政府の機関ですが、巧みに資金を調達してきました。図書館員が寄付をしてくださる人々に対してプレゼンテーションを行ったり、見学等も提供したりしています。あともう一つ大きく変わったことがあります。この議会図書館のプライオリティが

変わったということです。新しい時代が到来して、議会図書館でもデジタル化を大幅に進めています。それに伴い、私達がカバーできる範囲も大きくなり、さまざまなソースを電子的に提供しています。もう一つの変化とは、議会図書館が今や一般大衆にサービスする大きな部門を抱えるようになったということです。二つの機能、一つが研究施設としてのもの、もう一つが観光客を惹きつけるための機能を持って、その方面へのサービスを提供しています。

松岡：国会図書館はそういったアトラクションにはならないかもしれませんが、国際子ども図書館は修学旅行生のアトラクションにはなりうるのではないのでしょうか。今ヤークシュさんがお話しになったように、議会図書館と国会図書館は似通ったところがあるけれど、違ったところがあるので、例えば、募金をするために子どもの本のセクションは非常に有効だということは、ちょっと国会図書館では考えられないことかもしれません。やはりここで、非常に大きな役割、今、ヤークシュさんがおっしゃらなかったけれど、やっぱりアメリカの場合には公立図書館のシステムが非常によく行き渡っていて、そのシステムの上に議会図書館が成り立って、役割を果たしているといえるのではないのでしょうか。

シャリオットさんは、ミュンヘンの国際児童図書館としての50年の歴史に関しておっしゃられることがあるのでしょうか。

シャリオット：ミュンヘン国際児童図書館は国立機関です。いわゆる青少年省が資金を出しています。また、ババイア州、ミュンヘン市などが出資しています。これらの資金提供機関が、ドイツの子ども達にどんなことをしているのかと私に質問してきます。それに対してはいろいろな蔵書を充実させているし、それから50万冊の児童文学書、130の言語の翻訳書も集めていると答えます。いわゆる通常の学生向け、あるいは外国の旅行者へのサービスも提供しています。そして、同時にまた、この新しい国際子ども図書館のように幼児向けのプログラム、学校のクラス向けのプログラム、あるいは公立図書館向けのプログラムを提供しています。また、作家別、イラストレータ別、外国の本について、平和についてなどの展示会をテーマ別に行っています。こういった展示会などを通じて、国際的な国と国との繋がりを伝えるものとなってほしいと思っています。児童書は、国際的な児童書、古典的な児童書が日本でも多く翻訳されています。長年にわたって他国の児童書の翻訳ということに対して、日本は非常にオープンな姿勢をとっています。ドイツとフランスとは兄弟の関係にありますが、児童書ということでは交流が必ずしもうまくいっていません。私は、外国の本を展示して、あるいはプログラムを作る事によって、いろいろなことができると思います。また、先生といっしょに学校の子ども達が決めた読書室、閲覧室へやってきて他の国々の子どもたちと交流することもできると思います。ある時、イタリアの女の子が「ま、私の言葉だわ、読めるわ」と言い、イタリアのセクションからある本を取りだして、皆に読み聞かせていました。他

の子達にとって、ドイツ語があまり上手ではないイタリアから来たこの子は、イタリアの本に関しては女王様の存在になったのです。また、こういった学習をとおして、子どもたちは国際的な本の面白さに気づきます。オリジナル版の言語のものがあればその他の国の子ども達も読むことができます。だから、これらの子ども達に本を提供することで、子ども達は世界について学び、国際理解、国際関係ということを知ります。単に本を提供しているだけではなく、子ども達に読書の手助けをして、非常に努力を払っているわけですが、こういった努力の背後に本当に必要なことは、本に関わる人々が何を望んでいるのかに心を砕くこと、子ども達が最高の本を読み、良い考えにふれることなのです。そして、個性、心を発達させることができる、こういったことを読書は果たすことができるのです。国際的なスタッフと仕事をするのは難しいことですが、しかし、国際的な図書の紹介というのは非常に大切であります。これは亀田さんにも是非申し上げたいと思います。蔵書が増えれば問題も増えてきますが、こちらの国際子ども図書館にも是非成功を祈りたいと思います。私もドイツでの経験に基づいて言えば、私はとても満足しています。小さな妹、姉妹が生まれたようなものですし、世界のどこを見ても、国際的な児童図書が集められているということ、青少年、子ども、そして大人のための蔵書があるというところはなかなかないのです。もし皆様方が司書、先生といった本に関わっている方だったら、この国際子ども図書館は非常に意義のある場所となるでしょう。皆様自身で、スタッフといっしょにプログラムを作ることもできると思います。背後にある精神というのはこういった資料の収集、そして集めた蔵書で何ができるかを考えることが重要です。だから今回私はここへ来て、非常に嬉しく思っています。そして、この図書館の誕生に関わることができて嬉しく思います。

松岡：このドイツの児童図書館は、先ほどにもありましたように、レップマンさんのイニシアティブに始まって、いわゆる国ではなくて、民間から始まったことですが、今は国、州、市が財政的なバックアップをして運営されているということ、そこでは国際ということにたったプログラムが、先生や親たちや図書館に対してできているということで、ユニークな国際的なナショナルセンターとしてよく機能しているようにお話をうかがいました。そこで、亀田さんにお聞きしたいのですが、国際的に資料を集めるということ、ミュンヘンの場合にはその国の言葉のできるスタッフを抱えて、それでも問題が大変多いとシャリオットさんはおっしゃられましたが、これから先、国際的な資料を収集していくことについて何か方策がごありでしょうか？

<資料を収集するという事>

亀田：とても難しい問題です。国立国会図書館では子どもの本だけではなく大人のさまざまな本を収集していて、もちろん各言語が分かるスタッフがたくさんい

ますが、子どもの本を専門に世界中の本を集めていこうとすると、それこそ、百何十という言葉を対象としてとても大変なことだと思います。まず、各国立の図書館とかセンターとかといったところで、自分の国を代表するような本のリストを作っていられっしやる場所もあると思いますが、そういうところからは情報を頂いて、なるべく集めていきたいということもありますし、特にアジアなどではアジアの本を集めるということはとても難しいので、それぞれそれぞれ、読書普及に携わっていられっしやる方々から現地の情報などを頂くというような仕組みを作っていかなければならないと思っています。まだそういう仕組みを作るところまでできてはいませんが、いずれ、外国についてはこういうネットワークをフルに活用できるような施策が必要だと思いますし、それは逆に、日本のものを外国に伝えていく上でも必要だと思います。また、日本の中でも日本の本について、外国の本についてそれぞれ専門にいられっしやる方がおられるので、そういう方々のお力を借りることを含めて考えていく必要があると思います。

松岡：本を収集するとか情報を集めるということについてIBBYとして何かできることはあるでしょうか。

島：IBBYという枠組の中でなくても、できることはあると思います。国際子ども図書館は国の機関ですが、NGOと政府ということをあまり分けて考えないで、個人の力を吸収していくことです。最初に松岡さんが国際子ども図書館が何をしてくださるのかと皆さんが思っていられっしやるであろうとおっしゃったけど、ケネディではないが、「あなたたちは国際子ども図書館に何をしていただけですか」と亀田さんがおっしゃらないと、大変なことになる(笑)。実際にコレクションというのは皆が考えてできるものではないのです。一生かかって一人の人がコレクションをしたら、その人の一生を頂くわけですが、そういうものを頂かないわけにはいきません。頂けばその人のコレクションもずっと生き延びるわけです。そしてその社会のために役に立つわけです。その発想をしてほしいです。そのためには個人が遊びながら50年、60年、コレクションをする人を残しておかなければならないということなのです。そういう人は組織の中にはいないかもしれない。一生うろうろしてコレクションしている、そういう人材が日本にいなくなったら、日本の宝はなくなるでしょう。それから子ども達を世界に放浪させたいいいんですよ。その中で、誰かが生き延びて(笑)すばらしいコレクターになるでしょう。国立国会図書館はそういうコレクションを持っている。たとえば蘆原英了コレクションです。このコレクションを全部国立国会図書館は頂いているわけです。今後毎年誰かが亡くなる時には(笑)資料を頂く、そういう受け手となるぐらいの発声を国会図書館はしなさい、といいたい。それはコレクターが国会図書館にあげようと、彼等に思わせなくてはならないのだから、素敵な国立国会図書館になっていただかないと、

ここにはあげたくないと思われかねないから、絶対にあげましよう、あげたら未来の子どものために使ってくれるだろうと。だからそういう形で日本のコレクター、外国のコレクターもわざわざ日本にしてくれるかもしれないから、決して望みを捨てないで、どうやって集めようかなどと考えないで、皆さんに助けをいただいたほうがいいのです。そのほうがずっと現実的です。どうぞよろしくをお願いします。

ヤーグシュ：それはすばらしいアイデアだと思います。うまくいく考えだと思います。というのも、議会図書館でもやっているからです。私どもにも能力には限界があるわけです。かつて、サンフランシスコにある老人が死の床にあったとき、出かけて寄贈してもらえないかと頼みに行きました。人間が重要だといわれますが、大きな組織では個人的にはできないことがあります。皆様方と友人になり、手を差し伸べたいということです。そうすればできると思います。それが皆さんが満足できるような形になるまでに何杯ものお茶を飲まなくてはならないかもしれないし、時間もかかりますが。

松岡：民間の力と官の力が両方合わさっていくということは21世紀の進む方向として、定まっていることなので、日本の場合は子どもの本の世界ではNGOのほうが先にスタートしてかなり成熟している段階にあるわけだから、この人たちと良い関係を持って、国際子ども図書館が成長していくということがとても大切なことだと思います。それで、国際子ども図書館にはそういうことをよくお願いしたいです。自分の国にナショナルセンターのない国がアジアにはありますけれど、そういう国々とも今亀田さんがおっしゃったように、例えばミュンヘンの国際児童図書館がいわばヨーロッパのセンターであるとするれば、これから育っていく、東京の国際子ども図書館はどちらかというアジア地域のセンターとして育って行って、両方があいまって情報交換していくことによって、世界を上手にカバーしていくことができるようになれば、理想的だと思うのですが。日本の国際子ども図書館に対して何かおっしゃりたいこと、あるいは提案したいことがあればどうぞ。

ソンブン：皆さん一人一人が個人のポータブルな国際図書館なのです。今ここにいらしているからそうなのです。国際的な側面あるいは教育の過程というのは聞くことです。そして、本日は皆さんは私たちの話を聞きに来てくれたわけです。話を聞く、物語の語り部の話を聞くというのは、昔からの伝統でした。世界中でこのようなことが行われてきたのです。そしていろいろなことをそこから学んできたわけです。我々の祖先から語り継がれさまざまなことを学んできたのです。だから、自分自身で国際活動をスタートすることです。何かを聞いたそれを広めることです。そして、別の言葉で広めるということです。例えば、私の話を日本の言葉で伝えていいと思うのです。

宋：ソンブンさんがおっしゃったように、自分が国際化の発信者となることに自

信はないのですが、私は3年間東京で、東京子ども図書館からお話会の講習を受け、日本図書館協会の児童図書館員の講座を受けましたし、いろいろなことを勉強させてもらい、とても役に立ちました。それで、国際子ども図書館が各国のアジアのために役に立てるように、私が役に立てることが何かあったら、例えば韓国の絵本を選んだり、贈ったりなどしたいと思います。

松岡：大変力強いお申し出ありがとうございます。近い国でありながら韓国との関係があまり思う通りにいいていまして、今ここにこうして集まった機会を有効にして、良い方向にいけたらと思います。私も司会者としてではなく申し上げたいことがあります。先ほど亀田さんが、資料を網羅的に集めると言っておられていました。日本では子ども文庫という、NGOが国立に先駆けて始まり、成熟してきていると思いますが、その人たちに逆立ちしてもできないことというのがあります。それが、資料をしっかりと集めて保存することなのです。お金もかかるし、場所も必要であるし、それを管理する人も必要なわけです。彼らは子どもと本を結びつけることは十分にできると思うけれど、例えば古い本をしっかりと保存して、勉強をしたいという人のために使うということはなかなか私どもの立場ではできません。戦後の子どもの本を導かれた先達の一に瀬田貞二さんという方がおられますが、瀬田先生は『落穂ひろい』という子どもの本に関わる人々の歴史を跡付けた労作を残してくださいました。その先生が『絵本論』という本の中で、我が国ではすばらしい仕事もなされてもたちまち忘れ去られて、次の世代へ受け継がれていかないということを嘆いていらっしやる場所があります。例えば、江戸や明治ならいざ知らず、大正末期から昭和初めにかけて活躍した子どもの本の画家である岡本帰一のことさえ、作品は散逸し、業績を調べる資料もないということを先生は非常に憤っておられました。昔子どもの頃にあれらの絵をあれほど楽しんだ人々が、今それを忘れる、忘れることに一分の利はあるが、仮にイギリスで百年前の本を年々、代々人々が大事にして今も何百刷めかの新版を刊行しているという事実を照らせば、過去のしかも今日にも通用しうる資産を、弊履のように蔑ろにする、忘恩的進歩とはいったい何であろうか、とおっしゃっていました。例えば何かを調べようとするとすぐ、資料がないということにおち当たる。それによって、私たちの今の文化の底が非常に浅くなるということがあると思います。そういう意味で国立の図書館ができたからにはそういう資料がちゃんと調べられるようになって、私たち子どもの本を作る側の者たちがいろいろ勉強するときに、それにきちんと答えてくれるような場所になってほしいということを私は一つお願いしておきたいです。それから日本の文庫や子どもの本がこんなに発展してきたのも日本が50年間少なくとも平和であったということが非常に大きかったと思います。日本の青年が誰も外国へ人を殺しに行くことがなくて、日本の国土の中で戦火が交えられることがなかった。皆さんの話の中で、平和と

という言葉が出てきましたが、国際子ども図書館の国際とは平和ということでもあると私は思います。そういうことに関連して、最後に皆様から一言ずつ頂きたいと思います。言ってみれば国際子ども図書館への、今ここにいらっしゃる皆が何かいい贈り物をしてくださればと思います。

<国際子ども図書館への願い>

ヤークシュ：私の願いは亀田さんにかけたいと思います。亀田さんが、非常に大変な官僚主義に立ち向かうとき、しばしば落ち込むことがあるでしょう。官僚主義というのはゆっくり遅いものですが、一方で、今おっしゃったようなこと、いろいろな遺産を受け継いで保存するというようなことをしてくれるわけがあります。だから、大変な時には、私に電話して下さい。官僚主義もいいことはやってくれるのだと覚えていると嬉しいです。

バット：今やっっている作業、アジアの出版物に対して力点をおいているということですが、素晴らしいと思います。昨日宋先生に連れられて、素晴らしい展示物を見せていただきました。だから国際的な図書館になっていただきたいと思います。そして国際子ども図書館がそのようなさまざまなアジア各国の美しいものを広めてくださればと思います。フランスではアジアについてよく知られていないからです。特に子どものことに関して。我々の図書館でも、素晴らしい児童書のコレクションをさまざまな国から集めるという試みを学べて嬉しかったです。インドのこのことなども話が聞けて嬉しかったです。この国際子ども図書館が特に西欧社会に対して、アジア地域での美しい出版物を広めて伝えてくれればと思います。

シャリオット：今おっしゃったように、私もまったく同感です。どのようにしてこの国際子ども図書館の国際化をサポートしていけばいいかと考える場合には、このよう考えてください。本を図書館にもたらず、あるいは海外旅行をしているような時はその本屋さんへ行って、買って、この国際子ども図書館に持ってくる、それだけでもいいと思います。私たちの図書館ではドアの前に置き去りにされている本を見かけます。戸口のところに置かれている、多くの失われ、置き去りにされた本が世界中から入ってくるのです。そういうことも役に立つのではないのでしょうか。

ダス：我々の置かれている状況ですが、たくさんいい本が必要です。児童文学は、我々の国では口伝が行われてきました。そして書き言葉、文学に関してはまだまだ学んでいる、発展途上の状況にあります。だから、皆様のほうからより多くの情報をいただきたいと思います。国際子ども図書館から、良質の本についての情報を頂けたらと思います。私どもがそれを、再版できるような、そして持ち込めるようなアドバイスがあれば、私どもの代わりに目や耳となってさまざまなアドバイスを頂ければと思います。我々が習練する、協力していく非常

に重要なきっかけになると思うのです。

ソブン：私の願いは皆様方全員が国際子ども図書館に来られることです。そして世界のさまざまな物語を読んでほしいのです。そして皆さんの口から次の人へとお話を広めてほしいのです。

宋：日本の国際子ども図書館が花火のように空高く照って、そのいくつかが韓国に照るように、アジアの国に影響を与えるように祈っています。ひとつの地球のなかで皆が仲良くしていけるようにお祈りしています。

島：松岡さんが平和についての質問をなさって、すごくいい言葉を思い出しました。平和は寛容によってのみもたらせるのだと。子どもの本の平和と寛容の展示会「ハロー・ディア・エネミー！」。これはシャリオットさんが作られて、今、日本に来ています。ぜひお子さんを連れて、この「ハロー・ディア・エネミー！」展を見に行ってください。

松岡：たくさんのよい願い事をしていただいております。ありがとうございます。亀田さん最後に何か一言お願いします。

亀田：遠くの国々から皆様すばらしいお話をしに来てくださり、ありがとうございます。知らない国のこと、遠くの国のこと、さまざまなことを教えていただきました。子どもと本と読書というテーマが、皆さんの期待していたような中身となったのでしょうか。励ましや提案など今日うかがったことを糧に今後、国際子ども図書館が、あそこに本をあげようと言っていただけのようなすばらしい図書館になるために、私たち職員は努力したいと思います。最後に、大変恐縮ですが、皇后陛下がご講演の中で子どもの読書に関することをおっしゃっておられる部分をここで、もう一度ご紹介させていただきます。

「今振り返って、私にとり、子ども時代の読書とは何だったのでしょうか。何よりも、それは私に楽しみを与えてくれました。そして、その後に来る、青年期の読書のための基礎を作ってくれました。それはある時には私に根っこを与え、ある時には翼をくれました。この根っこと翼は、私が外に、内に、橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育っていくときに、大きな助けとなってくれました。読書は私に、悲しみや喜びにつき、思い巡らす機会を与えてくれました。本の中には、さまざまな悲しみが描かれており、私が、自分以外の人がどれほどに深くものを感じ、どれだけ多く傷ついているかを気づかされたのは、本を読むことによってでした。」

これは皇后陛下のIBBYインド大会での基調講演の一部ですが、私はまさに子どもにとっての読書の意味の本質的なことが、この言葉の中にあると思います。こういうことのために、本日のシンポジウムが国際子ども図書館も、ここに集まった、子どもと本に関わっている会場の皆様も含めて、皆が、何か自分たちができることを一生懸命になってやっていけるような、一つのきっかけになったらと思います。今日は皆さん、本当にありがとうございました。

I B B Yコロンビア大会参加記

はじめに

2000年9月18日から22日まで、南米コロンビアのカルタヘナ・デ・インディアスにおいて、第27回I B B Y大会が開催された。筆者は、できたての国際子ども図書館職員として初めて、この大会に参加させていただいた。子どもに本を届ける活動に取り組む世界中の人々が集うこの会合への参加は、国際子ども図書館が国際的な視野をもち、また、この世界的なネットワークと連携して活動していくために大きな意義をもつことと思われる。一般には、まだ十分に知られているとは言い難いI B B Yの活動の一端を紹介しながら、コロンビア大会の様子を簡単に報告したい。



(会場となったコンベンション・センター)

I B B Yのこと

I B B Yという組織は、'98年の第26回インド大会における皇后陛下のビデオによる基調講演が一つのきっかけとなって、わが国でも一般にその存在を知られるようになった。また、現在I B B Y会長として日本の島多代氏が縦横無尽の活躍をされていることも、日本でI B B Yを身近に感ずる要素となったと思われる。

I B B Y (国際児童図書評議会) は、子どもと本をつなぐ活動に携わる人々の国際的なネットワークであり、非営利・非政府の組織として、I F L A等と同じように、カテゴリーB (情報・協議関係) に属するユネスコの協力機関である。1953年、ミュンヘンの国際児童図書館を創設したイエラ・レップマンによって組織された。現在、本部をスイスのバーゼルに置き、60余の加盟国に支部を持つ。日本の支部が、J B B Y (日本国際児童図書評議会) である。

I B B Yは、その使命として、①子どもの本をとおして国際理解をすすめること、②質の高い本が世界中の子どもたちの手に届くようにすること、③世界中、ことに発展途上国において、優れた子どもの本の出版や普及を奨励すること、④児童文学の調査・研究を促進すること、等を掲げている。主な事業としては、「小さなノーベル賞」とも呼ばれる「国際アンデルセン賞」や「I B B Yオナーリスト」、「I B B Y朝日国際児童図書普及賞」の選定・授与や、「国際子どもの本の日」の行事、多彩なセミナーやワークショップの実施、機関誌「ブック・バード」の発行等が挙げられる。2年に1度、世界各地で開催される大会は、世界のI B B Yメンバーと児童書の普及や読書推進活動に携わる人たちが集う最も重要な会合である。'86年には東京で第20回大会が開催された。



コロンビア大会

南米でIBBYの世界大会が開催されたのは、ブラジルについて2度目のことである。今大会は、アルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリ、コロンビア、キューバ、コスタリカ、メキシコ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラのラテンアメリカ11カ国の支部が協力し、コロンビアが主催国となって開催された。大会のテーマは、“The New World for a New World: Children’s books for the new millennium”で、日本語にすると、「来るべき世界への新しい結末—新世紀の子どもの本」（訳：島会長）となる。「南米の子どもの本と読者、出版社、作家、画家、図書館、書店は、これから新しい時代を築くために発掘されるはずの新しい世界である。」との意味が込められているのだという。



大会が開催されたカルタヘナは、カリブ海に面して広がるビーチに沿うコロンビア最大のリゾート地で、国際会議等も多く開催される安全な場所であった。海賊どもの略奪や外敵の襲撃に対抗して築かれた城壁に囲まれて、スペイン植民地時代の面影を色濃く残す地域と近代的な高層リゾートホテルが立ち並ぶ地域が共存している。夜の闇に照明を受けて

浮かび上がる歴史博物館のような街は、美しい。その街の中心にあるコンベンション・センターが大会の会場となった。大会の参加者は、42カ国から800名におよんだとのこと。日本からは、島会長や画家の安野光雅氏を含む11人と、少ない参加であった。ラテン・アメリカ諸国からは、地元であることと、力の入れ様を示すかのように、圧倒的多数の参加があり、どこにいても周囲で聞こえる言葉は、殆どスペイン語のようであった。

会期中、いくつもの講演が行われたが、イギリスのマーガレット・ミーク・スペンサーによる「子どもの本におけるナショナル・アイデンティティ」、アメリカのキャサリン・パターソンによる「子どもの本—新しい世界への架け橋」と題する各基調講演は、多くの参加者に共感と感動を与えた。また、安野光雅氏による絵本創作にまつわる話は、参加者を大いに楽しませてくれた。同氏は、会場やレセプションで多くの人に取り囲まれ、氏の作品の世界的な人気の高さを窺わせた。

講演のほか、ラウンド・テーブル「ラテン・アメリカにおける本の出版」、「読書とニュー・テクノロジー」「ラテン・アメリカにおける本の流通」等が、また各国支部の報告や、ラテン・アメリカ各国のスピーカーによる子どもの本や児童文学にまつわるさまざまなテーマでの



セミナーが複数の部屋で同時開催されていた。そのほか、重要なイベントとして、IBBYオナーリスト（最近刊行された優れた児童文学、絵本、翻訳文学の3部門を対象に、各国支部から各部門1点ずつの推薦を受けてそれぞれの作家、画家、翻訳者を表彰するもので、2年毎に授与される）の発表・表彰と国際アンデルセン賞授与式が行われた。後者は、ヘレディア劇場を会場に、賞の授与と受賞者によるスピーチに加えて、ダンスの公演やレセプションもあり、華やかで楽しいものであった。今年度の国際アンデルセン賞受賞者は、作家賞がブラジルのアナ・マリア・マシャード、画家賞がイギリスのアンソニー・ブラウンであった。

国際子ども図書館の視点から

ラテン・アメリカは、やはり日本からは遠い。文学ではガルシア・マルケスやボルヘスくらいは知る人も多いが、児童文学はあまり紹介もされていない。ラテン・アメリカ文化の形成に大きくかかわったスペインとポルトガルに、児童文学の伝統が薄かったために、この地域での児童文学もあまり盛んではないと書かれていたものを読んだ記憶がある。経済や社会の情勢が不安定な国々も多いこの地域でのIBBY大会は、準備から開催に至るまでさぞ大変な苦労があったことだろう。しかし、このような地域での開催であったがゆえに、世界各地からはるばる集まってきた人たちの子どもと本をつなぐ活動に対する情熱と、ラテン系の人たちのおおらかな明るさに、殊のほか強い感銘を受けた。この大会に参加して、ラテン・アメリカの子どもの本に今までよりずっと親しみを覚えるようになった。国際子ども図書館では、2001年早春に、中南米の絵本の展示会を計画している。日本の多くの子どもたちに、少しでもこの地域を身近に感じてもらう機会になることが期待される。

今大会に初めて参加して、改めてIBBYが掲げる使命は、国際子ども図書館のそれと重なるものであり、子どもと本をつなぐための活動には国境も官も民もなく、ともに手を携えて取組んで行く必要があるとの思いを新たにした。

次回の第28回世界大会は、2002年9月29日～10月3日スイスのバーゼルで開催され、IBBY創設50周年を祝うことになっている。できるだけ多くの人が、そこに集い、それぞれが子どもと本をつなぐ活動を進めていくための共感と励ましを得る機会にして欲しいと思う。

(亀田邦子)

活動報告

(平成12年5月～12月)

1. 展示会

3階の「ミュージアム」では、国際子ども図書館と国立国会図書館本館所蔵の資料を中心に子どもの本・文化に関する展示会を行っている。子どもの本の楽しい世界を紹介することを目的として、これまでに5回の展示会を開催した。

	期間	展示会	入場者数	開催日数
第1回	平成12年 5/6(土) ～6/4(日)	国際子ども図書館開館記念 子どもの本・翻訳の歩み展	17,199人	26日
第2回	6/10(土) ～7/16(日)	なつかしのえほん －昭和二十年代から三十年代 の子どもたちへ－	9,925人	32日
第3回	7/21(金) ～9/24(日)	アジアを知ろう －アジアの絵本と絵日記展－	17,431人	55日
第4回	10/7(土) ～11/26(日)	本に拍手を！ －アメリカ児童図書週間ポス ター展－	8,166人	42日
第5回	12/2(土) 平成13年 ～2/4(日)	絵本が映し出すオーロラ －北欧の作家と絵本展－	5,290人	48日

○第1回展示会（国際子ども図書館開館記念）

『子どもの本・翻訳の歩み展』

近代以降の日本において翻訳文化が果たした役割の大きさは、児童文学の分野においても変わらない。海外の作品の翻訳を通じて発展してきた近代日本児童文学の系譜を約300点の作品の展示により紹介した。

展示は、大きく2つの部分で構成された。1つは、明治以後、1960年代までの日本の児童文学の歴史を7つの区分に輪切りにして、それぞれの時期において、日本の創作児童文学の状況と、翻訳児童文学との関係を紹介。もう1つは、子どもの本の翻訳に関して、歴史的な観点だけでは見えにくい問題について、3つの特設コーナーを設けた。





<子どもの本翻訳の歩み・7つの時期区分>

- (1)子どもの文学の誕生 (1868年～1909年)
- (2)成長する子どもの文学 (1910年～1917年)
- (3)花開く時代 (1918年～1926年)
- (4)広がる子どもの本 (1927年～1937年)
- (5)戦争をはさんで (1938年～1949年)
- (6)「近代」から「現代」へ (1950年～1958年)
- (7)「現代」の出發 (1959年～1969年)



<特設コーナー>

- [1]子どもの本・翻訳事始
- [2]「翻訳」のさまざま
- [3]「絵本」がやってきた

○第2回展示会

『なつかしのえほん—昭和二十年代から三十年代の子どもたちへ—』

当館所蔵の児童書のうち、昭和20年代から30年代の子どもたちが親しんだ日本の絵本約180点とその原画8点を展示した。戦後まもない頃の絵本には、子どもの生活や期待される子ども像、外国への憧れなどをみることができ、戦後の復興期になると絵本観や出版形態に変化があらわれる。その歴史的变化もあわせて紹介した。

<戦後まもない頃の絵本>

知識の絵本 日本の昔話
童謡絵本 西洋のおはなし
出版社別絵本シリーズ

<トピック>

- [1]いろいろなえほん
- [2]のりもののえほん
- [3]どうぶつのえほん



○第3回展示会

『アジアを知ろう—アジアの絵本と絵日記展—』

当館所蔵のアジア18の国と地域の絵本約180冊を国別に展示。ハードカバーの美しい色彩の絵本、簡易な製本で一色刷の絵本、さまざまな文字・言語を持つ国の絵本、それぞれの宗教や伝統の特色がみられる題材の絵本など、各国のさまざまな絵本を紹介した。



また、アジア22か国の子どもたちが描いた絵日記パネル（三菱広報委員会所蔵）、各国の人口・面積・義務教育・出版状況などを写真パネル（ユネスコ・アジア文化センター所蔵）とともに展示した。



○第4回展示会

『本に拍手を！—アメリカ児童図書週間ポスター展—』

1900年初頭のアメリカで、子どもたちに素晴らしい本を届けようとさまざまな活動をしていた人たちが「児童図書週間（Children's Book Week）」という子どもの本の祝典を始めた。「子どもたちにとって読書が楽しいものになるよう、街に、そして家庭にたくさんの良い児童書を用意し子どもたちに届けよう！」を基本理念とし、現在でも毎年行われている。この週間を国民的な運動に盛り上げようと、第一線で活躍する著名なイラストレーターや絵本画家たちがポスターを通して、この理念を訴えてきた。

1919年から2000年までのポスター約75枚と、ポスターを描いている各画家の代表作にあたる作品、ポスターの原画などを合わせて紹介した。



○第5回展示会

『絵本が映し出すオーロラ—北欧の作家と絵本展—』

寒さと闇に閉ざされた長い冬と太陽の沈まぬ白夜の夏。厳しい自然のなかで北欧の人々は、神話や伝承文芸を語り伝えてきた。また、北欧には、アンデルセンをはじめ、数多くの児童文学作家がいる。彼らの筆から生まれたピッピ、ムーミン、ニルスは、世界中の子どもや大人から愛されている。さらに、ベスコフやオルセンに続く新しい絵本画家も活躍している。

日本で親しまれている北欧の児童文学と同時に、自然、文化、教育などさまざまな面を反映した絵本など約160点を展示した。



＜暮らしの絵本＞

ABCの本 子どもの生活

＜伝承文学＞

北欧神話 トロール

＜児童文学者たち＞

アンデルセン ラーゲルレーヴ

ヤンソン リンドグレーン

＜自然・音楽の絵本＞

自然と音楽 サンタクローズ

＜絵本作家たち＞

ニールセン ベスコフ

新しい作家たち

日本語に翻訳された絵本



2. 子どもの部屋小展示

4階の「子どもの部屋」では、テーマを決めてミニ展示を行っている。

＜テーマ一覧＞

きみはめいたんてい！／おなじみのなかまたち（6月～8月）

ぐりとぐら ひとまねこざる だるまちゃん とてんぐちゃん だるまこハリー 11びきのねこ

ぞうのババール

なつ、だいすき！（6月～8月）

およぐ キャンプをする あそぶ しらべる つくる そだつ

アジアを知ろう（7月～9月） 第3回展示会関連

オリンピック（9月）

どうぶつえんにいこう—うえのどうぶつえんニュース—（9月～11月）

どうぶつえんを知ろう どうぶつえんでだいじけん どうぶつの本いろいろ

アメリカ児童図書週間ポスター展（10月～11月） 第4回展示会関連

実りの秋（10月～11月）

ことばはまじゅつし（10月～12月）

クリスマスのえほん（12月）



3. イベント

「本!ほん!!ホン!!!」と題するイベントを2回行った。また「図書館総合展」にテーマ展示として参加した。

	開催日	名称	備考
第1回 本!ほん!! ホン!!!	平成12年 7/15(土)	なつかしの紙芝居	演者: 梅田 佳声 (うめだ かせい)
第2回 本!ほん!! ホン!!!	10/1(日)	朗読劇 「長靴をはいた猫」	公演: グループD. I. L.
第2回 図書館総合展 テーマ展示	11/16(木) ~18(土)	「21世紀の子どもたちへ の贈りもの—始動した国 際子ども図書館—」	主催: 図書館総合展 運営委員会

○第1回本!ほん!!ホン!!! 「なつかしの紙芝居」

戦後の時代を代表する風俗の一つである「紙芝居」。演者の梅田佳声氏は台東区立下町風俗資料館にて昭和56年から紙芝居を演じている。

「黄金バット」「ライオンマン」「西遊記」といった懐かしい紙芝居の数々を、1階エントランスにて上演した。午後のひととき、国際子ども図書館がタイムスリップしたかのように、今の子どもとかつての子どもが一緒に楽しんだ。



○第2回本!ほん!!ホン!!! 朗読劇公演「長靴をはいた猫」

3階の「ミュージアム」にて、グループD. I. L.の朗読劇「長靴をはいた猫」を上演した。グループD. I. L.は、物語や創作のお話などで子どもから大人まで幅広い客層を集めている劇団である。通常の演劇と共に、朗読劇（ナレーターが本を読み、それに合わせて役者が台詞を言い、芝居をする）を中心に活動している。

演目の「長靴をはいた猫」はよく知られたヨーロッパの民話をエーリヒ・ケストナーが再話したものである。二人による朗読と十数人の演者の場面場面に応じた劇によって構成されている。

朗読劇という方法を通し、長く親しまれてきた作品に対し、さらに新しい魅力を感じていただけたのではないだろうか。(参加者125名)



○第2回図書館総合展テーマ展示

『21世紀の子どもたちへの贈りもの—始動した国際子ども図書館—』

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換を目的とする図書館総合展が11月16日から18日の期間、有楽町の東京国際フォーラム展示ホールを会場に開催された。国際子ども図書館はテーマ展示として以下の内容で参加した。

<国際子ども図書館>

- (1) 建物
- (2) 所蔵資料
- (3) 電子図書館
 - ① 児童書総合目録データベース
 - ② デジタル・ミュージアム
- (4) 展示／イベント
- (5) これからの国際子ども図書館



4. 刊行物

パンフレット『国際子ども図書館』

同英文版『The International Library of Children's Literature』

国際子ども図書館開館記念『子どもの本・翻訳の歩み展示会目録』

展示会パンフレット『アメリカ児童図書週間ポスター展』



5. 職員出張

当館の職員が、子どもの本や児童図書館サービスについての知見を得るため、また各地の関係者との意見交換を行い、人のネットワークを作っていくために以下の研修、会議等に参加した。

	国内出張	海外出張
平成12年 5月		
6月	6/20～23 東京都新任児童図書館職員研修 資料情報課員2名参加（東京都千代田区）	
7月	7/24～25 日本子どもの本全国研究集会	
8月	資料情報課員1名参加（東京都練馬区）	8/13～18 第66回国際図書館連盟 （IFLA）大会 児童図書館分科会 企画協力課長 （イスラエル）
9月		
10月	10/25～27 第86回全国図書館大会児童・青少年サービス部会 資料情報課員1名参加（沖縄県那覇市）	9/17～24 第27回国際児童図書評 議会（IBBY）大会 国際子ども図書館長 （コロンビア）
11月	11/8～9 児童に対する図書館奉仕全国研究集会 資料情報課員1名参加（長野県長野市）	
12月		

世界の児童書—コレクション紹介—

国際子ども図書館は現在約20,000冊の外国の児童書を所蔵しており、その中には今では入手困難な稀覯書も含まれている。ここでは当館が所蔵するそうした貴重な資料の一部について簡単にご紹介したい。

1. ウィニングトン・イングラム コレクション

このコレクションは18～20世紀にわたる英米の絵本・児童書・教科書の包括的なコレクションであり、その主要部分は、イギリスのヘレフォード大聖堂主教座名誉参事会員であったエドワード・ヘンリー・ウィニングトン・イングラム師 (Edward Henry Winnington-Ingram, M.A.: 1849—1930) によって19世紀後期から収集され、その後彼の娘コンスタンスに引き継がれたものである。このコレクションには、ジョン・ニューベリーの出版物、18～19世紀の道徳教本、19世紀の冒険物語・学園物、ルイス・キャロル、ケイト・グリーナウエイやランドルフ・コルデコット、ペアトリクス・ポター、A. A. ミルン、J. R. R. トールキンの作品など、初版本を含めた数多くの貴重な資料が収集されており、コレクション全体としては、ほぼ300年のあいだに出された児童のための学習、道徳、娯楽目的の本の集成として、非常にユニークなものになっている。その総数は1,157冊で、関連する書誌の一覧を付した冊子目録が編纂されている。

2. 落合治吉氏寄贈欧米児童書古書

落合治吉氏より以下の7点10冊の欧米児童書古書が寄贈された。落合氏は、昭和26年に(株)落合製作所を設立し、各所に新工場を開設された事業家である。これらの寄贈資料は、19世紀の終わりから20世紀の中頃にかけて刊行されたもので、うち5点は美しい初版本である。

- ① アーサー・ラッカム『お伽話』初版 1933 ロンドン
- ② アーサー・ラッカム、ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』初版 1907 ニューヨーク
- ③ アーサー・ラッカム、ヘンリック・イブセン『パールギュント』初版 1936 ロンドン
- ④ ケイト・グリーナウエイ『四つの物語』モロッコケース入り 初版 1878-88 ロンドン
- ⑤ ヘンリー・スピールマン、ジョージ・レイヤード『ケイト・グリーナウエイ』オリジナル鉛筆スケッチ画 総モロッコ革装丁本 1905 ロンドン
- ⑥ 『幸福な動物家族のおはなし』飛び出す絵本 1897 ロンドン
- ⑦ ジャン・ド・ブリュノフ『王様ババール』初版 1933 パリ



数字で見る！

国際子ども図書館

(1) 国際子ども図書館所蔵統計 (平成 12 年 12 月 31 日現在)

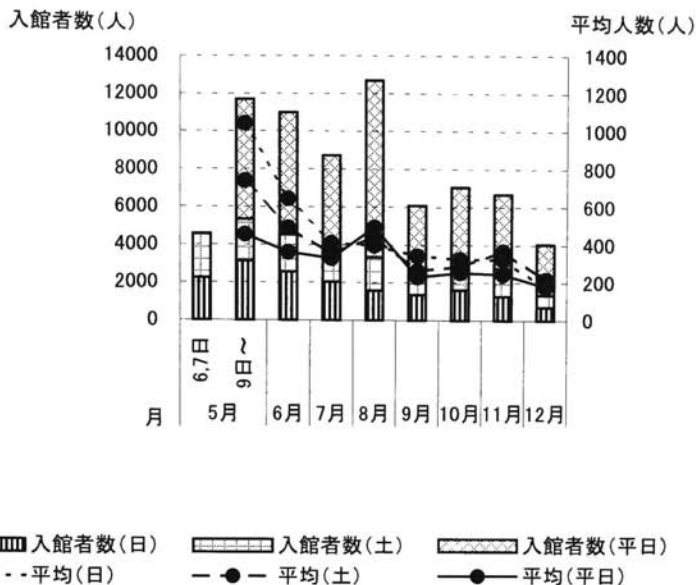
資料室	図書	日本語	児童書	15929	冊	
			児童書関連参考書	3796		
		外国語	児童書	アジア言語		4218
				欧米言語		17011
				児童書関連参考書		1023
		合計	41977			
	逐次刊行物	雑誌	日本語	568	タイトル	
			外国語	37		
		新聞	原紙	13		
			縮刷版	4		
	合計	622				
特別コレクション	イングラムコレクション		1157	冊		
	オビエコレクション(マイクロフィッシュ)		20824	枚		
子どもの部屋	絵本	日本語	1285	冊		
		外国語	271			
	文学		550			
	知識の本		796			
	合計		2902			

(2) 国際子ども図書館利用統計 (平成 12 年 5 月 6 日～12 月 27 日)

i) 来館者統計

		合計		曜日別内訳								
				火～金			土			日		
		日数	人数	日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
5月	6,7日	2	4564				1	2320		1	2244	
	9日～	20	11685	14	6345	454	3	2214	738	3	3126	1042
6月		26	10989	18	6464	360	4	1959	490	4	2566	642
7月		25	8710	15	4909	328	5	1757	352	5	2044	409
8月		27	12698	19	9349	493	4	1765	442	4	1584	396
9月		24	6085	16	3666	230	4	1056	264	4	1363	341
10月		24	7051	17	4297	253	4	1137	285	5	1617	324
11月		24	6676	16	3918	245	4	1467	367	4	1291	323
12月		22	4048	15	2689	179	3	650	217	4	709	177
計		194	72506	130	41637	339	32	14325	472	34	16544	528





ii) 「資料室」利用者統計

		合計		曜日別内訳													
				火～金			土			5月7日(日)							
		日数	利用者数	日数	利用者数	平均	日数	利用者数	平均	日数	利用者数	平均					
5月	6,7日	2	3039	/			1	1511	/	1	1528	/					
	9日～	17	2268				14	1727		123	3		541	180			
6月	22	2027	18				1577	88		4	450		113				
7月	20	1245	15				899	60		5	346		69				
8月	23	1825	19				1504	79		4	321		80				
9月	20	992	16				756	47		4	236		56				
10月	21	944	17				748	44		4	196		49				
11月	20	1055	16				809	51		4	246		62				
12月	18	648	15				500	33		3	148		49				
計		163	14043				130	8520		66	32		3995	125	1	1528	1529

iii) ミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

iv) 「子どもの部屋」利用者統計

		合計		曜日別内訳								
				火～金			土曜日			日曜日		
		日数	人数	日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
5月	6,7日	2	3395				1	1768				
	9日～	20	6916	14	3042	218	3	1392	464	3	2482	827
6月		26	6531	18	3490	194	4	1166	292	4	1875	469
7月		25	5006	15	2513	168	5	1038	208	5	1455	291
8月		27	7979	19	5925	312	4	1002	251	4	1052	263
9月		24	2935	16	1488	98	4	611	153	4	836	209
10月		26	3624	17	2052	121	4	651	163	5	921	185
11月		24	3419	16	1807	113	4	713	178	4	899	225
12月		22	1878	15	1045	70	3	376	125	4	457	114
計		196	41683	130	21362	164	32	8717	272	34	11604	341

v) 複写サービス利用統計

	件数	枚数
5月	94	921
6月	57	593
7月	60	704
8月	99	1006
9月	54	450
10月	43	504
11月	42	511
12月	44	539
合計	493	5228

vi) 資料出納統計

	合計		閉架資料出納		予約出納	
	点	冊	点	冊	点	冊
5月	21	30	20	29	1	1
6月	5	5	5	5	0	0
7月	9	29	6	23	3	6
8月	28	29	14	15	14	14
9月	18	44	15	41	3	3
10月	15	15	11	11	4	4
11月	13	45	11	43	2	2
12月	19	37	14	32	5	5
合計	109	197	82	167	27	30

*予約出納：国立国会図書館配置資料

vii) 資料館外貸出統計

	合計	国会議員	図書館		
			行政・司法支部	公共	大学
5月	3	3			
6月	2		1	1	
7月	1			1	
8月	3	1		2	
9月	1				1
10月	1	1			
11月	2	2			
12月	1	1			
合計	13	7	1	4	1

viii) 国際子ども図書館見学実績

	見学			比率%
	件数	人数	総入館者	
4月	1	30	0	-
5月	14	108	16249	0.7
6月	28	459	10989	4.2
7月	30	554	8710	6.4
8月	30	682	12386	5.5
9月	30	363	6085	6
10月	51	775	7051	11
11月	44	684	6676	10.2
12月	22	265	4048	6.5
合計	250	3920	72194	5.43

ix) レファレンス統計

		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
録作成	文献目録									0
	文書									
文献紹介	文書	3	2		1	1	2	1	2	12
	電話	4	10	2	11	4	14	10	4	59
	口頭	34	11	17	30	25	15	18	15	165
査	文書							2	1	3
	電話	1	10	5	4	4	5	6	4	39
	口頭	25	22	20	29	17	29	33	19	194
査	文書							2	1	3
	電話	1	3	6	1	0	18	1	2	32
	口頭	25	16	9	18	11	12	9	10	110
所蔵調査	文書	2				1		1	3	7
	電話	4	22	25	24	23	24	9	22	153
	口頭	71	68	65	114	45	51	38	22	474
所蔵機関調査	文書	1				1			1	3
	電話	1	5	4	12	2	4	4	4	36
	口頭	22	14	24	49	16	19	15	7	166
利用案内	文書								1	1
	電話	2	10	4	7	9	6	5	3	46
	口頭	170	88	95	138	64	48	29	30	662
	援助検索	123	100	71	120	55	48	47	29	593
その他	文書									0
	電話	5	3	10	3	4	5	2	3	35
	口頭	131	55	68	118	60	36	54	30	552
合計	文書	6	2	0	1	3	2	6	9	29
	電話	18	63	56	62	46	76	37	42	400
	口頭	601	374	369	616	293	258	243	162	2916
総計		625	439	425	679	342	336	286	213	3345

*検索援助は口頭によるもの

これから……

国際子ども図書館の今後の予定を紹介します

2001年

- 4月8日 中南米の子どもの本展終了（2月10日から3階ミュージアム）
- 4月14日 カナダの子どもの本展開始（9月2日まで3階ミュージアム）
- 5月5日 一周年記念日（祝日だが開館）
- 9月 動物の絵本展開始（11月まで3階ミュージアム）
- 12月 永田町本館からの資料移転準備作業および全面開館準備作業（本館からの資料の搬送・排架、子どもの部屋の整備など。開館までに一定期間、準備のためのサービス休止を行う予定）

2002年

- 1月末 国際子ども図書館庁舎改修工事竣工予定
- 3月 「国際子ども図書館の窓 第2号」刊行
- 5月頃 全面開館
 - 全面開館記念展示会「不思議な世界の仲間たち」展開催（新ミュージアム）
 - 全面開館によるサービスの拡充
 - ・子どもの部屋・ミュージアムの移転・拡大、お話し室、第二資料室、研究・研修室、多目的ホールの設置
 - ・電子図書館機能の充実
 - ・学校図書館に対するサービスの拡張
 - ・協力プログラム（国内・国際）の実施



利用案内

☆来館利用

利用できる人 どなたでも利用できます（ただし資料室の利用は18歳以上の方に限られます）。

所蔵資料 1997年末以降受け入れの国内で出版された児童図書、外国語の児童書。児童書関連図書、雑誌等。

資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。

資料請求 9:30～16:30（於資料室）

開館時間 9:30～17:00（ただし10月から3月の間、3階ミュージアム、4階子どもの部屋は16:00閉室）

休館日 月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日を除く）。年末年始（12月28日～1月4日）。

休室日 休館日のほか、以下の日が休室日となります。

2階資料室：日曜日

3階ミュージアム：展示会準備等のための休室日

※ 永田町の国立国会図書館の所蔵資料となっている国内児童書も多数ありますので、電話等による事前の確認をお勧めします。

（例）・1996年以前に受け入れた資料（1997年受入の一部資料も含む）

・児童向け雑誌・新聞

※ 次の資料は予約が必要なので、資料室カウンターで申し込んでください。

i) アジアを除く海外の児童書のうち、絵本以外のもの

ii) 海外の絵本の一部

☆図書館に対する全国サービス

国際子ども図書館は、全国の図書館を支援するサービスを行っています。満18歳以上の方なら全国の最寄りの図書館を通して当館のサービスを利用できます。

◎サービスの概要

◆レファレンスサービス 文書（郵送・ファクシミリ）・電話によるレファレンスを受付けています。『レファレンスサービス』の項も併せてご覧ください。

◆複写サービス 文書（郵送・ファクシミリ）による申込みを受付けません。

◆図書館間貸出 図書館間貸出制度加入館のみ利用できます。

貸出可能資料は当館所蔵の児童図書のみで、貸出のできない資料もあります。国立国会図書館所蔵資料については国立国会図書館にお問い合わせください。なお利用はその図書館の閲覧室内のみとなります。



☆レファレンスサービス

- ①範囲 国際子ども図書館所蔵の児童書に関すること、児童文学、児童図書館活動に関すること。
- ②主題 i)所蔵調査 ii)所蔵機関調査 iii)書誌的事項調査 iv)文献紹介 v)類縁機関案内
- ③申込方法 レファレンスは以下の方式により受け付けます。
- ◆直接来館 資料室にて受け付けています。
 - ◆文書レファレンス 最寄りの図書館を経由した、郵送・ファクシミリによるレファレンスを受け付けています。
 - ◆電話レファレンス 電話では所蔵調査、利用案内、書誌的事項調査（目録記載程度）などについて件数を限って受け付けています。資料を直接確認しなければならない場合など、時間を要する調査、および聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。なお、資料室の休室日、閉館後は受け付けていません。

☆複写

著作権法の範囲内で、国際子ども図書館所蔵資料について、複写することができます（有料）。即日製品をお渡しする即日複写と、閲覧した資料の複写を申込み、後日製品を受け取る後日引渡し複写の二種類があります。

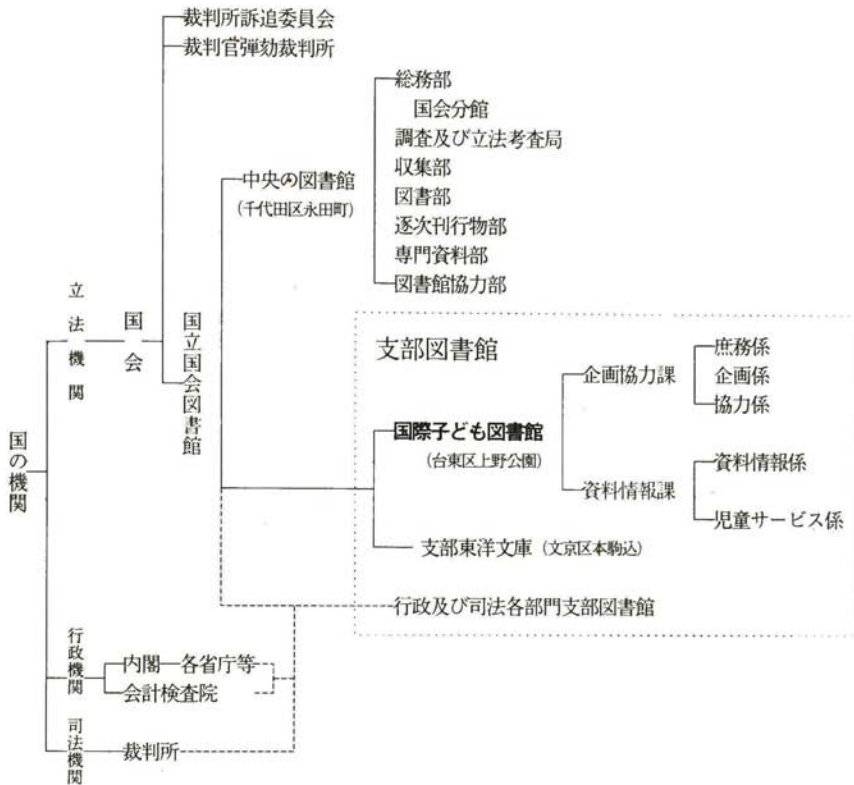
複写受付場所	資料室
複写受付日時	資料室開室日の10:00～16:00（10:00～12:00は受付のみ）
製品引渡し時間	12:00～16:00
複写の種類	即日複写 電子式複写（普通のコピー。白黒・カラーがあります） 後日複写 マイクロ複写（マイクロフィルム・マイクロフィッシュ等、複写過程に撮影作業のある複写）

※ できあがった製品を郵送もいたします。料金は後払い（振込）です。図書館を経由した郵送・ファクシミリによる複写申込みも受け付けています。詳細はお問い合わせください。

☆見学のお申込み（要予約）

見学については事前の予約が必要です。詳しくは国際子ども図書館企画協力課企画係までお問い合わせください。職員が案内する1時間程度のもので。

国際子ども図書館の位置付けと機構



国際子ども図書館の窓

第1号 2001.3

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 平成13年3月1日発行
 編集責任者 亀田 邦子
 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
 電話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043
 E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp>
 印刷所 株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。

The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No. 001 March 2001

Contents

Frontispiece : Opening of the International Library of Children's Literature	
On the International Library of Children's Literature Masao Tobari	2
Upon issuing of the "The Window : the journal of the International Library of Children's Literature" Kuniko Kameda	3
<Special feature : commemorating the opening of the International Library of Children's Literature>	
At the inaugural ceremony	
Address delivered by H. M. the Empress	4
Words of greeting Dr. Barbara Scharioth	8
The road to the opening of the International Library of Children's Litera- ture Mikio Wanaka	12
"Children's books and reading" : report of the International Symposium commemorating the opening of the International Library of Children's Lit- erature	15
Participating in the IBBY Congress in Columbia Kuniko Kameda	45
ILCL activity report	48
Children's books from abroad in the collection of ILCL	55
ILCL in figures	56
Schedule hereafter	60
User's guide	61

NATIONAL DIET LIBRARY

Tokyo